六

鈴木君の父は兄弟十二人、鈴木君の兄弟も同じく十二人あつた、世の中の變り目から此多勢の者が、有らん限り變化のある生活をした、自分の兄弟も、殆と奇を好むと言はるゝ位に職業を分化して見たが、なほ鈴木家の方が面白い。叔父さんの中には維新の戰爭に一人、會津の城で朝敵になつて戰死した。あの家には琴の趣味の外に、討死趣味の遺傳もあるらしい。其外に東京へ出て穀物商をやり財産を作つた人もある。次の代の兄弟も職業は甚だ區々である。君のやうに大きな人が外にもありますかと聞いたら、一人も無いのみならず、氣性もちつとも合はないと云ふことである。其原因として本人は斯んな事を云ふ、多くの兄弟は里子に遣つて育てられ、自分ばかりは領主の家に子が育たぬ爲に家へ預けて置かれたので、此若殿と一所に母の側で成長した。其せいであらうと云ふことである。是も看過することは出來ぬが、猶一つは受けた血の種類である。世にはあまり本も讀まぬのに、頻りに祖先の生活に纏綿したがる人がある。又昔風な人だと言はれる人がある。當人は一向意識もせずに、父祖が踏んで行つた道筋を歩みたがる。之と反對にそれこそ木の俣から生れたやうに、自分のことばかり考へて居る人も中々多い。傳說の束縛があまりに煩はしかつた舊時代には、一種の反動的作用として此の如き人格を尊み、之を御先祖になるべき人と云つたものである。今は又此類の人の多きにたへない。國風の變る虞がある。

鈴木君の家が如法の千年家でありながら、今以て鼠算で繁殖するのを見ても、所謂家の死滅は決して其屬員の死に絕えるのを意味しないことがわかる。然らば家は如何にして老い且つ死ぬるかといへば、段々に系圖を失つた家と血を交へて、傳說を忘却するやうな分子を增し、先祖の血の中で躍つてゐた細胞が弱くなつて、分孽を怠る樣になることであらう。此點から見れば家にも確かに壽命がある。長くとも三百年を以て古稀と稱せねばなるまい。

自編『郷土會記錄』

（大正二年六月）

郷土會の創立は明治四十三年の秋であつたと思ふ。郷土會と云ふ名稱は、最初からのもので無かつたが、假にさう呼んで居るうちに、次第に親しい言葉になつてしまつた。自分の處には第四十回頃までの記錄しか存して居らぬが、少なくとも大正八年の末までは續いて居た筈である。其八月に大擧して、津久井の内郷村へ研究旅行に出かけたのが、たしか、第六十何回かの催しであり、後に又其報告の會があつたことも記憶して居る。

新渡戸博士が大戰爭の終頃に、外國へ出て行かれたことが、會の中絶した主たる原因であつた。と謂ふのは博士がその靜かにして淸らかな住居を、いつも會の爲に提供せられたのみでは無く、又至つて注意深く參集者の世話を燒かれたので、誰も彼も少しでも早く、次の會日の來ることを願つて居たのが、もうさう云ふことが無くなつたからである。他の會員の家などで開かれた場合には、とてもあの樣な行屆いた亭主役は勤められなかつた。例へば會の食事なども、いろ〳〵皆の悅ぶやうな用意をして置いて、先生は我々が意を安じて食べるやうに、わざと名ばかりの會費を徵せられた。又成るだけ話がはづむやうに、色々の珍客を臨時に招いて置いて、至つて自然に新らしい刺戟を與へられた。此會の幸福だけから言ふと、博士が色々他の方面に於ても、大切な人で無い方がよかつたのである。

臨時一時の來會者の中にも、忘れてしまつてはならぬ人が多かつた。其半數ほどは此記錄に名が出て居るが、他の半分の人々は來去の年月が不明である。さうしてもう此書物を見ることの出來ぬ世界に、往つてしまつた人も少しは有る。過去の生存を考へて見ようとした我々の生存の、一部は亦既に過去のものになつた。一部分なりとも其痕跡を保存して

見たいと思ふ所以である。

大正二年から六年の春まで、自分は一つの雜誌の編纂に與つて居た。その偶然の結果が、是だけの記錄の保存であつた。只殘念なことには、時々の都合で自分の筆記が、或は簡約に失し或ものは稍完全に近く遺つて居る。今再び之を校訂するに當つて、いろ〳〵當時の印象の、よみがへつて來るものも有るが、固より增補を試みるべき性質のもので無い。又講演が此記錄の前後に屬し、或は他に理由が有つて、全然筆記することの出來なかつたものゝ多いのは、如何にしても不本意な次第である。

精勵なる會員の中には、木村修三君、正木助次郎君、牧口常三郎君、小野武夫君などがあつた。三宅驥一博士なども、中途加入以後最も熱心に出席せられた。その人々の名前が、一度も此記錄の中に現れて來ぬのは、寧ろ不思議とも謂ふべき偶然である。殊に木村君の諏訪の畠作灌漑の話などは、新らしい興味ある一研究であつた。さう云ふ類の逸品が、多く逸し去つたのである。拙く且つ誤脫あり得べき自分の此筆記が、決して鄕土會の全幅の事業を傳へたもので無いことは、會の面目の爲に繰返して聲明して置きたいと思ふ。

次の頁以下の記文は、悉く皆集會の直後に作成したものである。誤字を正し、些しく體裁を改めた外には、何の變更をも加へて居らぬ。なほ若干の地圖も、力めて其年代のものを採用して添へて置くことにした。

新渡戸博士が久しぶりに、日本に還られることになつて、今ちようど印度洋の船の中だといふ新聞を見て、すぐに自分は此記錄の編纂に取かゝつたのであつたが、博士の日本滯在があまりに短くして、此本が出來上つたところで今一度、舊鄕土會員の集會をしようとした我々の計畫は成就しなかつた。出版の上はジュネーヴの先生の寓居へ、早速此本を送らうと思ふ。

（大正十四年四月）

讀書雜記

偶讀書抄

正月になつて讀んで見た本の中で、もつとも心を動かされたのは考古學會の『造像銘記』であつた。自分などは專門家で無いために、殊に印象が新らしく又鮮かであつた。

最初は『古京遺文』などの如く、銘文だけを保存して置く計畫であつたのが、後に匿名の篤志家が數千圓の費用を出してくれたので、一一寫眞を副へて印刷することになつたといふ。さうすると標題は當らぬかも知れぬが、効果は十倍も加はつて居るのである。

以前に出た『紀年鑑鏡圖譜』などと同じ趣旨で、金石木像に伴なふ銘文に由つて、的確に作品の年代を知り、他の多くの無銘像の出來た時を推定するといふのである。

その理由で足利期の終まで、いやしくも文字の殘つて居る限りは皆集めたから、選擇の標準は技藝の優劣では無かつた。中にはひどく破損し又良い寫眞の得られなかつたのもあるが、百六七十ある中の半以上は、同時に立派な藝術作品であり、殊に七つか八つかは、いつまでもぢつと眺めて居たいほど美しいものがある。今はボストンにいつてしまつた興福寺の「みろくぼさつ」なども、始めて惜いものだつたことがよく分つた。膳所の圓福院の釋迦如來の光背の如きも、フラ・アンゼリコのもつとも完全した曲線を思はしめるほどのものであつた。

尊い多くの御正體御本尊も出て居る。これを透して古代人の信仰の一部分が、知るといへなくとも少なくとも感じられる。考古家の羅拜する推古天平の古像はもちろんであるが、世降つて佛師の藝のやゝ職業化した時代のものでも、かうして幾つかを比べて見るうちに、色々の事を敎へてくれる。一概に豐麗などと形容して居た圓顏の中にも、少しづつの特徴のかはつて來るのを見ると、無意識にかも知らぬが、やはり時代時代の美しい姿容が、いつとなく寫生せられて居たのである。この中には我々のゆかしく思ふ昔の人の顏が、なほ偶然に活きて居るかと思はれた。

（「讀書標」昭和二年一月號）

『耳袋』とその著者

日本藝林叢書の中には感謝すべき採錄が多い。殊に喜ばしいのは『嬉遊笑覽』の善本が出たことゝ、もつとも引つけられるのは馬琴翁老後の書簡集であるが、兩方とも讀むのに中々

肩が張る。それよりも私に取つて興味の盡きざるものあるを感ずるのは、江戸の町奉行をして居た根岸肥前守の雜談集『耳袋』といふ書物のごく素性の確かな六卷本が、今度始めて活字になつて出たことである。

自分でもどうかしてこの書を版にして見たいと、思つて居たわけが三つほどある。第一にはこれが標題の示す通り、全部耳から聽いた話ばかりで、少しでも書齋の臭氣の無いことである。津村正恭の『譚海』などがやゝこれに近いが、本を書かうといふ位の人には、どうかすると持合せの博識が頭を出して、やたらに人に教へたがつていけない。さうして折折は時代と社會とを混亂させる。うぶな時代相は、かういふ一定の横斷面からで無くては見ることが出來ない。地方にもしこんな筆記ものが有つたらきつと面白いのであるが、今日知られて居るものは甚だ少なく、本になるどころか大抵は屏風の下ばりか何かになつてしまつて居る。幸ひにこの書は筆者が名士であつたゞけに、早くから寫し傳へた人が折々はあつたのである。

これまで自分などの眼に觸れた『耳袋』は、をかしい程異本が多かつた。恐らくは著者一生に伴なつた事業であつて、まだ完成せぬうちに人が借りて行つて寫して居たのであらう。中には寫す人の好みで抄錄したかと思はれて、一冊二冊にまとまつて同じ標題を付したものもある。明治三十二年に集めた隨筆襍誌の中へ入れて印刷したものも其一種である。私の家の藏書も六冊本であるが、藝林叢書と比べると始からちがつて居る。半分ばかりは同じ記事らしいが、順序は一向に一致してゐない。一々當つては見ないけれども、私の本の方が話は少なく、しかも今度の集にはもれてゐる珍な話もある。事によるとこの新活字本を基礎として、まだ若干の增補が出來る。他日愛讀者が多くなれば、分類や索引を企てゝ見るのも面白からうと思ふ。

よくもこんな話が、御奉行の御隱居の耳に入つたと思ふ樣なものが少なくない。旗本としては類の少ない一代立身で、いはゆる下情には通じ切つた人らしいが、傳を讀んで見ると、如何にも謹嚴な、かつ行屆いた紳士であり、身分年齡から考へても道樂の友人などは無さ

さうな人である。それが御話相手に出入をするわづかな社交人の口から聽いて、家來に寫させて置いたりしたといふ話で、よくもこれだけの分量を積み貯へたものである。驚くべき根氣である。夜話といふものゝ興味を昔風に、かつ潤澤に有つて居た人でなければ、ただ丹念といふだけではこの仕事は出來ない。奇事異聞の間々にさしはさんで、いや火傷の妙藥とか百足の出ぬまじなひといふやうな民間知識が、幾らとも無く書留められて居るのを見ても、老人の人柄までが眼に見えるやうな感じがある。

私のこの著者に對して深い親しみを抱く今一つの理由は、早くから彼の鄉里を知つて居たことである。根岸肥前守の實父安生太左衞門は、もと相州若柳村の農民であつた。後に多分御徒の株を買つてその組に入り、組頭から追々に働き上げて、末には御代官までになつた人である。著者はその三男坊で、養子先の根岸家は素より歷とした御譜代の幕臣ではあつたが、その少年の日の生活は想像せられる。若柳は中央線與瀨の停車場から、桂川を隔てた南の方の、以前は型の如き奥在所であつた。八年ばかり前に自分はこの村へ遊びに行つて、土地の人からこゝが根岸肥前守の生れた村ですよといふ話を何度も聽いた。津久井一帶の山村には、戰國亂後の浪人が多く土著し、機會ある度に出て社會に働いて居る。根岸氏などはその最後の一人であつた。氣力からいつても情味からいつても、さびしい田舍の地のみで保存されて居た中世日本人の特徴が、まれには斯うして發揮せられることもあつたので、ひとり江戸文化に漂蕩されて居た官場生活の中において、優に頭角をぬきんづることを得たのみで無く、一方にはまた久しく持傳へた山居の武士の好尙と熱情とを、かくして容易に新らしい社會に應用することを得たのである。

根岸肥前守藤原鎭衞（ヤスモリ）前名を九郎左衞門、その前には通稱を鐵藏といつたさうである。藝林本の末文に別號守臣翁とあるのはあるひは誤りではあるまいか。私は守臣は守信であつて、晩年の名乘だと心得て居る。この一點の疑念を除いては、全部原本の所藏者で、またこの版の校訂者たる三村竹清君の用意に推服してゐる。

（「讀書標」昭和四年三月號）

百年前の散歩紀行

今から丁度百年程前、清水家の御廣敷番に村尾正靖といふ六十ばかりの老人があつた。この老人は頗る旅行好きで風流な人であつたが、勤めが忙がしいので長旅の出來ない處から、いつも休みの日には日歸りの旅行を試みた。旅行など〻大袈裟に云ふよりも、草鞋履きの遠足と云つた方がいゝだらう。『嘉陵紀行』二十卷は卽ちその日歸りの旅行記なのである。

何しろ江戸を中心とした日歸りのことだから、行く所と云つても大抵高は知れてゐるが、それでも足の達者な人で、時によつては一日に十五六里も歩く。同じ場所へ三度も四度も遊んだ紀行文もある。八十餘歲の高齡にまで達した人だが、亡くなる近くまで年々春秋の紀行がある。その中でも面白いのは、春の初めに府中へ行つて甲州境の連山の雪を望み、山中の生活を懷かしがつた一文である。そこには鼻紙に書いた見取圖を本の中へ寫し出してある。

この人は周防の岩國の產で若い時から江戸に來てゐて、初め濱町に住んでゐたのが後に三番町へ轉じたゞけで、別に遠國へ旅行した經驗もなかつた。一度淺間山の煙が見たいと思つてゐた處、或人の話に中仙道の桶川まで行けば見えるとの事なので、わざ〳〵そこまで出掛けて行つた。をりしも秋の初めつ方、樹の葉が繁くてどこからも山が見えない。とりやその男が嘘をついたのかと思ひ〳〵、段々と歩いて上尾の宿を外れた畠の中の塚の上まで來ると始めて淺間の煙が見えた。所が歸りに蕨から川口の方へ來る途中、畦路に立つて後ろを振返つて見たら、既にこゝからも淺間の見えることが分つた。

その頃川口の町の南北はまだ廣い原野であつて、一里も雜木林の中へ入らうものなら、

鹿などが住んでゐたと書いてある。その川口町の近村なる新曾の妙顯寺に子安の釋迦堂といふのがあつた。この老人は早く男の子に逝かれて了ひ、末の娘は二人共他へ緣付いてゐた。娘が始めて產をする時に、立願の爲に釋迦堂に參詣した紀行などもある。

或年の秋の末に一僕を伴つて新井の藥師の北を歩いたをりの文章がある。江古田の村には金滿家が多い。靜かなひつそりした村で、路傍の草叢には蟋蟀が鳴いてゐる。村の中程に茶店があつた。そこに休んで雜談をしてゐると、主人の老婆が老人の持つてゐる椰子の實の水筒をひどく稀らしがり、自分でわざ〳〵酒を買つて來て、先づ老人からその盃で一つ乾した後自分にも飲ましてくれと望んだ。

或年の春、江戸の近郊の寺々の花を觀て歩いたことがある。今の早稻田から大久保邊にかけては廣い原續きであつた。澁谷から目黑を過ぎ、白金を經て高縄の某寺まで來た。本堂の緣に腰を掛けて靜に花を觀てゐる、跡から自分よりは稍年下の老人がやつて來て、色々と話をしかけた。この老人は信州松代在の人で、子と孫が合せて數十人ある、至つて仕合せな人であつた。總領が家に在つて豐かに農事を營んでゐる外に、息子の中には高名な和尙もあれば、江戸に出て立派な金持になつてゐる者もある。旅行でもして氣樂に餘生を送らうといふ人であつた。

この信州の老人は、田舍者が何といふことなしに江戸の町をぶら〳〵歩くのは、目立つて可かぬと思つたので、駒込の花を見て淺草へ行くのに、一荷の干大根を買ひ込んで、それを路々賣りながら歩いた。淺草に着いた頃、大根は皆賣れて五百文ばかりの金になつたのを、寺內の乞食共に分けてやつて來たと云ふ。

嘉陵の紀行はその數が四十程ある。見て歩いた寺々の花も今は多く枯れてしまつた。櫻を植ゑたり、牡丹を栽培したり、立派な泉水を造つたりして、江戸の風雅人を喜ばしてゐた近在の舊家は、大抵は見る影もなく衰へ果てゝ居るやうである。『嘉陵紀行』を讀んで自分の見聞した所と比べて見ると、僅か百年の間に江戸は勿論、近郊の靜な田舍までが、驚くべき變遷をしたといふことが分る。

一青年の旅行記

（「文章世界」明治四十三年四月十五日號）

先日御成道の文行堂から、二十錢で買つて來た美濃判半切五十六枚の、道中日記帳と題する横本は、恐らく世上最廉價の著者自筆本である。さうして外に複本の無いことも亦ほぼ疑が無い。どう云ふ人の手を經て來たのか知らぬが、兎に角に今日迄、八十二箇年ほど保存せられて居たのである。此から後はどう成るのであらう。自分は偶然にも不朽と云ふ問題に一寸出くはせた。そこで供養の爲に其内容を書き遺して、我「同人」に結緣させたいと思ふ。

此日記は天保七年の六月二日に、東上總の一村を出立した青年の、江戸から東海道を上つて伊勢熊野和歌ノ浦を巡歴して大和に入り、其から京大阪近江八景などを見物して、明石高砂名所の松も殘さず、備前から船に乘つて金比羅嚴島、周防の錦帶橋を西の止りとして、山陰道に立越えて出雲大社にも參拜し、天ノ橋立から再び近江に出で中仙道を歸つて來た、丁度百日の大旅行の記錄である。

筆者の名は中村軍治郎、歳二十歳時と本の終に書いてある。即ち文化十四丑年の生れで、今は少くとも孫の代になつて居る筈である。在所は上總埴生郡下永吉村と有つて、今の長生郡鶴枝村の大字である。茂原の町から二十丁ばかり南の岡の蔭である。自分は以前何度か此村に遊びに行つたことがある。あの同じ樣な閑靜な生垣の、何れが此青年の老い且つ死んだ家であらうか。折も有らば尋ねて見たいと思つて居る。

さても六月炎天の菅の小笠、ましてや村では田の草池の水の營みも有るべき時節に、何として若い者が遙かの旅には思ひ立つたのであらうか。是は一つの不思議である。日記の

中には連れの有つたらしい記事は少しも見えぬが、帳の端に小さな字で同行四人也、林峰松早野村齋田周次郎同順次郎と書いてある。京の知恩院の門の前で、松藏千代吉政次郎、此三人の者に行きあふたとも書いてある。さすれば此時代には東國の農家で、子弟に世間を見せる良い風習の有つたものであらうか。兎も角も一身の不首尾などの家出では無く、氣樂な旅であつたことだけは親はれる。

然るに又一つの不思議は、知らぬ他國の百日の草枕に、山も越えた、海も渡つたのに、嬉しい寂しい面白いと云ふ文句が、只の一箇處も見えぬことである。大體此書物の特色は、後に行く人のために書き殘したやうな點に在る。飛脚が賴まれて廣告をするかと思はれる樣な道中記など〻は事かはり、例へば名所舊跡の簡單な記述にも、水晶の如き此若者の頭腦を通して、當時の社會相とも云ふべき案内者の口付きが親はれる。同じ旅店の何屋何左衞門でも、土地の風に由つて宿賃の取り方が違つて居たことが記してある。關西の宿屋では辨當附きで料金がきめてあつた。晝食には茶店で菜を買へば、茶代に拂ふ錢が少くてすんだ。社寺の門前では米代と木錢で泊める家が有つた。木錢と云つては五文か十文であつたが、米は必ず一升の價を取るから結局費用は同じであつた。斯ることも分るのである。讃州丸龜から宮島岩國迄の船賃が、雜用を込めて一分と七十五文であつた。尾州の佐屋から桑名への川舟は此頃は七十二文であつた。わらじの値段なども土地につれて大きな相異が有つた。甲州駿河邊りは十六文、西へ行くほど安くなつて熊野などは八文から十文、京でも北國でも十二三文より高くはなかつた。其が木曾に入ると又十六文である。是は多分米作の多少と關係して居たことであらうと思ふ。

凡そ此若い旅人などは、物堅く心懸けの良い、恐らくは昔の時代の理想的青年であつたことゝ思ふ。この長い道中に一切の入用を手帳に付けてあるいたのすら奇特であるのに、買つた物はわらじに鼻紙に晝食の菜の外は、甘い物一つ求めた樣子も無い。小づかひ二十文などと記してある日にはわらじの代を付けて居らぬ。多分は家に歸つて〆上げて見たときに、帳面通りの殘金が財布の底から轉げ出したことと思ふ。但しこれと同時に旅人として

理想的であつたか否かは實は些し疑はしい。此旅行が單純な官道の上り下りで無かつたことは前に言つた通りである。山阪の迂り路をして大山にも身延にも富士にも秋葉にも參つて居る。京大和では人のあまり行かぬ山寺までも見盡して居る。其にも拘らず益軒の諸州巡りに見える樣な批判と云ふものが些しも無い。偶々或海邊の好風景に對してひどく感動したらしい處に、「此ところ景色よろしく申候」など〻書いて居る。

思ふに此點に於ても亦彼は昔の理想的青年であつて、腹の中に在る物の八分の一以内を發表するのが文章だ位に考へて居たのかも知れぬ。皆の人の同じ場合に言つたり感じたりする範圍から、逸出するのは惡い事と思つて居たのかも知れぬ。

しかし彼は普通人のしさうな事の中の、最も情味の有る事をやつて居る。歸路に木曾の奈良井を立つ朝、七十二文出して櫛を買つて居る。又七百五十文で重箱を求めて居る。諏訪に來ては合羽と足袋とを買つた。上州高崎に來て巾着を買つて居る。九月十一日江戸に着いた翌日、一分一朱を投じて袷をこしらへた外に、二朱と八百文で風呂敷を調へたとあるのは、自用の一枚だけでは無くて、是もやはり在所への土產物であつたらう。下永吉で尋ねて見たら、今でも其重箱ぐらゐは殘つて居るかも知れぬ。京の智恩院の門の前で、鄕里の知人に往き合せたと云ふのは、誠に奇遇と言はねばならぬが、此處にも亦嬉しかつたとも何とも記して無い。只其日の條下に「酒代十三文」とだけ書いてある。此旅行中、後にも先にもたつた一度の保養であつた。乃ち淡く酌んで袂を分つたことであらうと思ふ。而うして其人々も、終に皆居なくなつてしまつた。

（「同人」大正七年三月一日號）

霜夜談

我が燈火

小さな窓から外は完全に眞暗だ。僅かな書物が或一人を取卷いて居る。そのさま〳〵な文化の遊歷者の中には、長い難儀な旅行から戻つて來て、今は靜かに休息をして居るのだと、言つたやうな顏付も見える。諸君の感想は成程諸君の時代であり、又氣質であり境遇であつたかも知れぬ。新たに出かけて行く者を、再び案内して貰ひたいといふので無い。少なくとも何が諸君を誘ひ又は引留めて、さういふ根氣のよい旅人にしてしまつたかを話してくれ、と尋ねる言葉も亦獨り言であつた。わかるものかといふのか忘れたといふのか、書物はまじ〳〵と默つて私を見て居る。外は全く風が無く又もう騷ぐ木の葉も無い。今夜もうんと霜が降るだらう。

菅江眞澄

眞澄翁の五十年間の紀行のうちで、約四十種が今日まで殘つて居る。南部領に關する六七卷は、昨年の秋『南部叢書』に採錄せられて世の中へ出た。秋田でも今年は『秋田叢書』の計畫があるから、必ず其中へ加へずには居らぬだらう。津輕も勿論負けて居まいと思ふ。さうすると莊内の一冊と松前の四五冊と信州の二冊が寫本で殘る事になる丈だ。翁の鄕里の東三河の人々は、是で始めて斯んな先輩が我地にあつたことを知るのである。

十七八年以前に、自分が始めて『眞澄遊覽記』なるものを讀んで、何とかしてこの感激を友に分ちたいと思つた時から、二つの殘念な故障が附いて廻つて居た。其一つは挿畫が餘りに美しく且つ精彩を帶びて居る故に、添へると印刷が六つかしく、取れば後が淋しくなることであつた。其中でも今の内閣文庫の本は佐竹家へ獻上したものらしく、特に畫工に托して自作の寫生を描き改めさせて居る。さうして眼に見るやうな印象を、半ばこの彩色の鮮明に手傳はせて居るのである。第二には文體と文字、是が亦尠からず新らしい讀者を遠ざけようとして居る。眞澄は歌文と學問とを資糧として永年の遊歷を續けた人であるが、今は却つて其二つの武器が無かつたらばとさへ思はれるのである。さうすれば差引して後

に何が殘るといふ人もあらうが、實際非常に大切なるものが、色々と其外に保存せられて居るのである。此人の物を見又心付く力は、本當にいつの間に歌などを考へるかと思ふばかりである。全體に聰明で且つ感情の極めて豐富な人らしく思はれる。家を出てしまつた理由は今に不明であるが、漫遊文人の生活方法として、交遊を上流裕福の人に求めなければならなかつたに拘らず、途上に心を引かれて居たのは、常に小さな人々の笑や悲みであつた。さうして相應によく理解し、しばらく彼等の側に立つて反抗を試みて居るのは、何か共通の不滿があつたのかもしれぬ。故郷を棄て去つた天明三年から、羽後の角館で客死した文政十二年まで、この約五十年は、江戸京都の學問の可なり著しく進展した時代であるが、彼の雲浮草の移り動く生活に於て、しかも奥羽の片田舍をあるきながら、何の手段があつてか略世の歩みにおくれなかつた。それが一つの自信でもあつたと見えて、往々にして之を文章の縱横によつて證明しようとして居るのである。即ち觀察はよしや周到を極めたとしても、もし筆の自由が彼だけで無かつたら、記して我々に傳へようといふ勇氣が起らなかつたかも知れぬ。さうして書かない旅人ならば昔から東北には隨分多かつた。

鶏啼く秋

故に偶然でもあらうが此人の紀行には、他の如何なる書卷にも書いて無いことが多くある。世の最も倨傲なる者が、なほ感謝すべき新らしい知識を湛へて居る。殊に北端三縣の住民として大切なることは、彼等が他日ふりかへつて我が昔を知らんとする場合に、如何に骨折つても是以外に尋ね寄る方角が無い。獨り百數十年前の或土地の舊事が、眞澄のみによつて記要せられて居るといふだけで無い。眼前にしかく變化した漁農の生活の、もと何樣であつたかを說かうとする際にも、恐らく具體的記述として是より古いものは無く、是だけに例示的な、正しく他の部分を類推し得る材料もあるまい。といふ理由は最も簡單で、つまり極端に有りふれた凡人のしがない生活に、この不遇の旅の歌人の如く、好奇心

と同情とを拂つた者が他に無いからである。あつたかも知れぬが書いて置かぬからである。今でも雪國の秋から春と言ふものは、誰も彼もが皆能因法師である。俳諧は必ず旅三昧の副産と見られて居るが、それですら南部津輕を、伊勢近江の海邊山家のやうに、取扱ひ得る者は一人もなかつた。名所歌枕を訪ひ寄ることは、雀になつた實方中將も同じであつた。御奉行は街道をしづ〳〵と練り通つて、單に旅宿の屏風の陰から、罷り出づる者に向つて江戸の問ひをかけて居る。詩文も亦概念であつた。ところが眞澄翁だけは雪の中に立つて見て居た。永い冬の四十何回かを、誰かの家の爐の側に坐して、用の無い滯在客として靜かに過ごして居たのである。

北地の秋が早く暮れて、盆が終るともう西日が寒く、林が色づく後からもう霰霙が來ることを、暖國の人だけに驚いて何度も書いて居る。しかし其間にも外に出て色々の鳥の聲を聽き姿を見た。夜が更けると鶴が群れて啼いて行く事が多かつた。親を思ふといふ歌が、さういふ折にはよく詠ぜられて居るが、それが月並の聯想とのみは思はれない。晴れたる日に空を見て居ると、雁が來て又鶴の群と入り亂れた。やがて雁金は遠くへ渡り、鶴は横にそれて暫らく舞つて居たとも書いてある。濱に出て見ると千鳥の足跡があつた。岡の陰では兎の行くのを見た。鹿の今通つたらしい跡も、折々は雪の上に見たと記して居る。

雪の野のまぼろし

寛政四年には蝦夷から十月の始に還つて來て、下北半島のオコッペ（奥戸）といふ港に上陸した。普通の旅人ならば急いで南の故郷へ向ふべきであるのに、彼は其儘この海角の村村を漫遊し始めて、忽ち雪の中に閉ぢ籠められてしまつた。それが見ず知らずの土地であつたのである。勿論風流の友は段々に出來たが、何度か旅支度をとゝのへて又新たなる國へ行かうとして居たのは、やはり安住する事を得なかつたものと思はれる。それで居て到頭外南部の深い雪の底に、三回まで正月を迎へて居るのである。殆と凄愴と言つてもよい。

のは、二年目の十二月の寒い一日に、昔の尾駮の牧の趾を見て國に還ると謂つて、多くの送別の詩歌を貰つて田名部の町を立つた。無理な旅だといふ人も多かつたが、果して大平洋の荒濱に於て雪車も通らぬほどの大吹雪に遭つた。そうして牛の背に飢え凍えつゝ、再び舊友の家に戻つて來たのが年の境であつた。及部白糠から平沼へかけての一帶は、知つて居る人もあらうが、今でも滿足な旅籠などは得られぬ土地である。ましてや冬のさ中に一人行くなどは、世の常の風流としては少し烈し過ぎる。全體に幾らか身を投げ出したやうな形があつた。年は此頃は四十すこし前で、他人の記す所によれば常に旅刀を帶び、國學者だから無論僧形ではなかつた。

恐山へは嚴冬の雪の中にも登つて居る。寺は森閑として留守の僧が夢の如く獨り住んで居た。山の湯の末の池には、人を怖れぬ鴨が浮び、夜はむさゝびが入つて來て、鼠を追ひまはして騒いだと書いてある。

雪の野の寂寞は土地の人は顧みない者が多かつた。家庭も無く友も少ない他國の者が、獨りでしみ〴〵と之を感じて居たらしいのである。眞澄の早くから興味を感じて居たのは、冬の最も靜かなる季節に、諸處の山野に出現する蜃氣樓の景であつた。今は立派な邑になつたが、三本木平の廣野にも二月の頃にはそれが眺められた。土地の人々は之を狐が柵をふると謂つた。秋田でも森吉山の麓から、八郎潟の岸近くにかけて、野道を行くものが折々之に出逢ふのを、此方面では狐森と呼んで居た。陸中でも和賀郡後藤野のあたりでは、周圍の村々の人が今でも之をよく話する。眞澄の頃には狐の館と謂つて居たが、此頃は狐の御作立てと名づけて居る。オサクタテは正月の農祭の飾りで、信州で物作り、東京近くで餅花といふのも同じである。春の初めに此野を遠く望むと、多くの人影が動いて土を持ち又は木を立てる樣子が見える。誠に雪に倦みきつた人々の心が春に蘇つた時に、ちようど見たいと思ふやうな幻しであつて、東北の農民は狐が最も巧みに人の意を迎へて、斯ういふ光景を見せてくれるものと、つひ此頃までも想像して居たのである。

（「農民」昭和三年三月號）

讀書懺悔

圖書館の三つの事業のうち、實際日本に發達したのは二つだけで、一つは少しも顧られてゐない。何人も發見蒐集し保存さへして居れば、それで能事をはれりとする。理想的司書でも皆さう思つてゐるが、今日の如く本の多すぎる時代には、指導が必要である、選擇が必要である。指導といつたところでたゞ本屋の手先の如く、徒らに新しい名前を、いゝ加減好奇心の多い讀者に教へればいゝわけでない。一方には讀むに及ばぬことを教へねばならぬ。もしくは是非讀むものを教へねばならぬ。大體、近代の傾向は責任を讀者の方に持たせて、何處にでも歩きさへすればよいやうにしてゐるが、それは成熟した人の話で、初めて世の中に眼をあげる人にはそれだけでは足らない。これが學校の爲とか村の爲とかいふ小規模の社會事業、土地の人のために開かれてゐる圖書館の特殊な任務である。理想を上野の帝國圖書館においてはいかぬ。もつと考へねばならぬ。

自分の子供がちようど讀書力が出來て來たので、私には今さかんに自分の少年時代の記憶が蘇つてゐる。明治中期でも實は書物が非常に多くて、田舍に住む者にも、とても一生に讀みきれぬ程であつた。どれ〳〵を讀まうかといふやうな考へを持ちはじめてゐた。江戸や京都の讀書人は、それより約百年も以前から實際選擇難に苦しんでゐた。指導に關する書もいろいろあり、各學派毎に讀書指導といふのがあつたやうだが、吉益東洞の讀書矩といふものがあつた。私の曾祖父は所謂古流の醫學生で、若い時に吉益門下に居つた關係からだと思ふが、家には少しばかり此學風が入つて居た。父が少年の時に寫してだんだんに書入をしていつた一冊があつた。三段に書物の種類を分けて、經義、皇道、格知として讀む順序が書いてあつた。それを見ると、なるほど子供心にもこの順序で書物を讀めば

偉くなるだらうと思ふほどだつたが、如何にせん私の家にはその中のとびとびにしか本はない。書物のすきな少年なら、押入に一ぱい位の本はすぐ讀んでしまふ。順序などといふことは考へて居られない。從つて私の家では、田舍であり貧乏であつたために、親も子も已に十分に選擇の必要を感じて居りながら、選擇をすることが出來なかつた。極端な雜書亂讀の惡癖はその頃から附いて、とう〳〵一生を煩はすやうになつてしまつた。だから痛切に今日になつて子弟の爲に圖書館の完全なるものを必要と感ずる。

子弟が今何を讀んでゐるか、何に興味を持つてゐるかといふことだけは、どうしても先輩がそつと目立たぬやうに注意しておかねばならぬ。そんなに骨の折れることではないと思ふ。普通の家庭のやうに机にさへ向つて居ればそれでよいやうな風に考へては、學問は二葉から蝕まれる。自分などは、例へば本の鑑定がはやく出來るとか、退屈な本を思ひ切つて見捨てるとかいふ風の利益も亂讀から得たとは認めるけれども、全體を綜合すると惡結果になやまされる方が確に多い。例へば、青年期の最も感受性の强い數年間を、次から次へと文學の本を讀み、讀んで感動するだけでも精力の浪費であつた。模倣して何かやつて見ようとさへ思つた位である。たしかに目的を以て學問をする者の警戒せねばならぬ陷穽におちたものである。周圍を見まはすと、かういふ私みたいな仲間が可なり多い。さうでなかつた方が却つて少ない。とれだけの年數をかけながら日本の學問が少しも進んでゐない主たる原因はこゝにあると思ふ。改良しなければならぬものは學校の教授法ではないと思ふ。學校は種々なる傾向の少年を寄集めて大體を教へる所であるから、作れば優良な凡人しか出來ない。一派の研究に秀でた人を作るためには、彼等のうちの優れたものを教へ込むといふことを忘れてはならない。

實際をかしいくらゐ自分の讀書生涯は亂雜なものであつた。今思ひだして見ると一人で興味を感ずる位である。私は少年の時には、あんまりいたづらがひどいので、何處かにやつて本を讀ませねばならぬといふので、幸ひに父の友人に中井竹山の門流に屬する藏書家があつて、先代は若死した人だが、短い間に大へん書物を集藏して居たので、そこにわけ

を話して一年程托されたことがある。今行つてみると家はまだ殘つてゐるが、家の後に土藏風の建物を造つて下を老人の隱居所にし、二階の八疊二間に本を一ぱいおいてあつた。少年だから私だけ、自由にその部屋に入ることを許された。朝入ると晝まで、晝入ると晩まで、呼ばれなければおりて來ない。小さな窓があつて、その窓の下の長持にもたれて立つて本を讀んでゐた。文庫は大部分中井氏の系統の實學風の經濟や文學書であつたけれども、その中に氣まぐれなものが澤山入つてゐる。例へば江戸の合卷草紙が何百冊と入つてゐる。極通俗な隨筆類とか、それから歌謠類とか、非常に完全な謠曲集などもあつた。それを少しも指導者なしにでたらめに讀んでゐる。時々主人が來て、また小說を讀んでゐるのではないかなといふが、そんな時には大てい小說を讀んでゐる。そんなことでは二階には上らせないと言はれたが、あんなに色々な本の中に一人おかれたのでは、目うつりしてそんなもの〻他讀めるものでない。儒書とか經書とかは長持にもたれながらは讀めない。わづか一年ばかりの間であつたが、一生煩はされてゐる雜學風の基礎はその間に作られてしまつた。

ところが滑稽なことには、同じやうな機會が、またやつて來た。それから一べん家に歸つてゐたが、十三の秋に兄につれられて茨城縣に移住してしまつた。兄も醫者で、極く邊鄙なある農村の、主人の若死した醫者の家を借宅して開業した。當主は當時は中學生で家に居らず、婆さんが一人小さい孫を世話して留守番をしてゐた。これは家をたて〻から四代目といふことであつたが、先代は珍らしい藏書家で、土藏の二階が悉く本であつた。どんな風に話合ひをつけたのだつたか忘れたけれども、土用干の手傳か何かをしたのが初めで、後には藏の中へ、藏さへ開いてゐれば何時でも入ることを公認されてゐた。いたづらさへしなければ捨てつぽかしにされてゐたが、こ〻には蒐集者が儒者でなかつた〻めに、非常に雜駁な、また少年のためによくない書物も交つてゐた。それから格別學問の盛でもない田舍であつたのに、をかしなことには近くにもう一軒、書物の多くある家があつた。此處にも時々行つて本を讀むことを許されてゐたが、そこには少年に悪い本が可なりあつた。

大へん不必要な、世間とは緣のうすい知識をこの時得てしまつた。一つには自分の體が弱くて正式の學校に行かれなかつたので、時間の餘裕が可なりあつた點もある。兄は正式に學問させようといふことを遲蒔ながら心づいて、國學の本などを東京から順序だて〻買つてくれたが、それも讀むがあれも讀むといふ風で、完全な圖書館が出來て居れば陷らずにすむ邪道に入つてしまつたのである。

ずつと後年になつて今の內閣文庫を整理したことがあるが、それをやりながら時々笑ふやうなことがあつた。その時には本の種類も大體わかり、青年のためには本は五段位に分けねばならぬと思つてゐたが、あの文庫もよく〳〵雜駁なもので、無いのは人情本だけといふやうな風であつたので、自分の經路を再び眼の前に見せられるやうな氣がして、微笑を感じないわけにはゆかなかつた。

ところが、をかしいことには、私のやうな人が明治から昭和にわたる時代には非常に多い。これは確にあの時代の風習で、同時に今日の通弊と言つてもよい。折角他にこれといふ長所がなくて、讀書と理解だけには調練を經てゐる人間を、言はゞ反故にしてしまつたのが明治の文化である。專門をやつてゐる人は、却つてどちらかと言へば鈍い人である。鈍いから横目をふらない。然るにこちらは盛にいろ〳〵のことに氣がつく、英語でいふ vivacious な人間である。そのヴイヴアシアスな人は皆をかしな人になつてゐる。もうこれからは此弊をくりかへしてはならない。又そんなものを博覽强記などといつてよいことのやうに思ふのは止めねばならぬ。それにはやたらに本の出るのもいかぬが、讀書術といふものを學課の一つに加へねばならぬ。

第一に家庭において、親ことに母親が、書物の價値には非常に差等のあることを知らねばならぬ。單に客觀的に書物に善惡のあるばかりでなく、少年青年の境遇や將來に應じて、良書もたちまち有害の書となることを知らねばならぬ、文字は卽ち尊いといふ數世紀前の考へから脫却せねばならない。此頃のやうに馬鹿々々しく本の出る時代に、本で生活しようとする時代に、その本の選擇力のないのは野蠻國に普選を布いたやうなものであるから、

文化の惡くなるのは分つてゐる。

講談社流の俗惡書はいくら呪つても足りないが、しかしそのために彼等をせめてはいけない。この多數の圖書館を造つて居りながら、その圖書館は冊數の報告ばかり、閲讀者數の報告ばかりである。大きな圖書館は成人が行くところであつて仕方もあるまいが、しかし範をそんなものにとつて村の文庫を經營する、學校の圖書館を管理するのは甚しい誤である。內容の分らぬ本を生徒に讀ませる。人殺である、實際人殺である。故に讀書運動は惡いことではないが、分量の促進を成功の標準とするのは惡い。豆を背負つてわざ〳〵論語を讀みに行つた時と時が違ふ。多すぎて大きすぎて困つてゐる、い〻本を詳しく讀めなくて困つてゐるのであるから。これに對しては學校が自ら苦心すると共に、家庭を導いてやらねばならぬ。ちようど運動の目的は漢字廢止運動などと似てゐる。一種の少年保護運動である。

大人に對しては下手な讀書欲の刺激よりは、却つて現在のやうな漠然たる傾向に於て、自ら警戒せしめたらい〻かも知れないが、子供にはさうはゆかない。あんまり禁ずると盜見するやうになるから、私の考へでは、公園に子供の區域を作るやうに、この中には入つてもよいといふものを作つてやり、聞かれたら答へてやるやうにしてやりたいと思つてゐるが、何よりも大切なのは指導者の親切で、これが無かつたら圖書館をこしらへた効はない。

大學の圖書館も何とかせねばならぬと思つてゐる。人手が少ない。それだのに金があると本を買つてしまふ。爲に學生はいよ〳〵本をさがすのに多くの時間を費さねばならなくなる。五六年前にプリンストンの大學に行つて見たことがある。あの大學は、本當に學問するためにたてた贅澤な學校であるが、ある日本の青年が、私に其處の圖書館を見せようといふので共に歩いてゐると、後から小さな聲で呼ぶ人がある。ふりかへつて見ると、そこに雇はれてゐる若い婦人で、「先日あなたの賴まれた石油の本がまた二冊見つかりました。」といふ。こ〻にはそんな婦人を何人か置いて、見る人のためにはかつてゐるのである。學生が何か論文を書かうとする時にはそこに行つて、私はこんな論文を書くつもりだと言

つておく。さうすると暇にあかして、それに必要な論文や統計のある箇所に紙をはさんでおいたりしてくれる。一べんや二へんきりではない。私を案内した青年などは三べん目か四へん目だと言つてゐた。カードでも作つておくものと見える。大きなものになればなるほどそれが必要である。

それに向の方では、本の索引がずうつと出來てゐるが、日本の圖書館にはそれがない。例へば、古記錄の中から亥子(ねのこ)のことをしらべて見ようとなると、何から何までみなさがして見ねばならぬ。しかし亥子なら十月といふ時が定つてゐるからいゝが、これがもし婚姻などといふ臨時のものを、急いで引いて見ねばならぬといふやうな時には困つてしまふ。上野の圖書館などに行くと、自分の體がかくれるほど本を積みあげてゐる人がある。

一生の間に二年とか三年とかしか本を讀まない人間に亂讀させてどうなるか。結果は分りきつてゐる。よくなりはしないと思ふ。自分は經驗に鑑みて、普通の出版業者の喜ぶやうな讀書運動といふものに對しては寸毫も同情はない。或はやつてくれない方がいゝとさへ思つてゐる。まづ以て指導者の講習會、もしくは指導者養成の事を始めねばならぬ。これが私の遠慮のない意見である。

（「全人」（圖書館と讀書號）昭和二年十二月十日號）

讀書術雜談

一

一代前の讀書子は氣樂なものであつた。學問が大體に共通で、人の讀みさうなものを勉强して、殘らず讀んで置けばそれでよかつたのである。吉益東洞先生から制定せられた讀書矩といふ書目が、自分の家などでは標準であつた。經學が中心でこれに加ふるに日本の古い史籍を以てし、なほ餘力が有るなら博物の書を見よといふ方針で、約三百ほどの著名

の本を擧げてあつた。それが都會でならば手に入れ得るものばかりではあつたが、しかも新著に對しては、概括的の不信用で、外史や國史略の類は、顧みないでよいことになつて居た。

しかし時代にはやはり流行があつた故に、人が讀めば之を讀まぬわけに行かぬ。そこで先づ書生は大なる苦勞をしなければならなかつたのである。殊に明治を境にして、新らしいもので無ければ學問で無いと思ふやうな氣風が增長し、終に今日の如き本の洪水が襲うて來たのである。かういふ時代に在つて新らしい讀書法が、打立てられなかつたら嘘である。

二

慰みに本を讀むといふことは、昔は御殿女中か隱居かの話であつたが、この節は十人の九人まで、若い男たちの讀書がそれだ。時事新報では本に索引を付けよと主張して居るが、それの入用な人は實は少ない爲に、多數の新刊物はいつまでも標題と體裁のみに力を入れて居るのである。これに對抗する策としては、つまらぬものを讀まされぬ用心に、中途で放棄する習慣をもつと養つて置く必要が寧ろ有る。ところが古い癖がなほ家庭には殘つて居て、買つた以上は少しでも利用しようとする爲に、またしても良著に接近する機會をこれに因つて奪はれる。自分なども思ひ切りが惡く、若い時から机の上に、いつもまん中に栞をはさんだ本が、十種以上も積んであり、人に笑はれ、さうして慢性の神經衰弱になつて居た。慰安が主なる目的なら、このくらゐ馬鹿げた本屋の奴隷は無い。斷じて人には勸められない方法である。

しかし書物に由つて學問をせねばならぬ者の境遇はまた別だ。西洋の本が際限なく入つて來てから、學者の苦しみはおそろしいものになつた。ちつとやそつとの索引では追つかぬ。これを巧妙に處理して、早く本の內容を知り、用のあるときに樂に出せるやうにする

のは技術である。大體においてそれが上手な人が、世の中には重んじられて居る。故に我我は何とかして彼等の口傳を探るべきである。

三

自分などは今以て表紙や序文で本の良否を鑑定する能力が無く、殊に西洋の本はどうしても、通して見ないと身にならぬやうに感ずる。だから書齋の生活は不斷の苦行であり、自分がさうだから日本の爲にも、何とか早く便宜な方法を立てしめたいと考へて居る。

けれどもまだこの方面は、今にこのまゝでは置かれぬ事を、感ずる人の多くなつて來る見込がある。それよりも遙に大切なことは、自國の本の始末である。近年の覆刻事業の傾向を見ても、慰みに讀む人々の注文は容れられるが、一段眞面目な本は讀むもので無いやうに考へられて居る。古い學者の心境との間には印字式の變化が完全な障壁を造つてしまつた。古書といつて珍重するものゝ今一つ奥に、世に忘れられた多大の知識がある。この絶縁の危險を救濟することは、眞の讀書子の本分であるが、もはやこれを說く人が減多に無い。自分は早くから因緣があつて、國の大きな文庫の中で數年間はたらき、偶然に早く本を見分ける練習をした。その後雜書を色々と讀む學問をして居る爲に、たれよりも讀書術の必要を感ずることが多い。格別參考にはならぬかも知れぬが、これから折々問題を提出して、同志の先輩の意見をたゝいて見ようと思ふ。

四

先づ第一に言ひたいことは、書目の學問の日本では根つから當てにならぬことである。古書の新發見といふことが、これからもなほ續くらしいことである。天下に一つしか無い書物が幾らでもあつて、その中には良書と愚書との相混じて居ることである。題目をきい

て見ただけでは、いつになつても本の學問上の價の定め得られぬことである。年代が古いといふことは珍本の資格を爲すだけで、その保存は大抵骨董家の領分に屬することである。即ち新古を分つこと無く、常に本を手にして暫く考慮しないと、讀んでよいか否かゞ分らぬことである。これはいはゆる讀書家の樂みであると共に、短い一生に何かしようとする人の、大いなる關所と言はねばならぬ。故に讀書術の第一歩は、鑑別から踏出さねばならぬのである。

五

考へられねばならぬ一つの問題は、民間の讀書子に有用な學問をさせる爲、何等か一國として公けに、援助を與へる必要が無いかどうかである。圖書館が八百屋で、机を借りに來る人でいつも充滿し、一部しか無い書物は中々大切で、燒いてしまふまでは名も聞かせないといふ今の狀態では、別に方法を立てる必要が正しく有ると思ふ。

古書飜刻を算盤に任せて置くと末には好色本を出して繁榮を謀つたり、少しの入用の爲に余計な凡書を買はせたり、二十年間に源氏物語の活字本を、二十種以上も出すことになつたりする。言ふにや及ぶの話だが、書物が我々のたつた一つの、古人との聯絡手段であるのに、たま〳〵萬人向きの題目で無く、しかもあまり丹念で冊數の多いのを書き殘すと、折角緣のある者も近よる機會が無く、一生同じ都會に背中合せで、住んでしまはなければならぬことになる。もし著作者に妄執といふものが有るなら、化けて恨んでも追付かぬ位なものである。

六

實際かうして埋沒して居る古書が、まだ幾ら有るものか分らぬ國である。それを片端か

ら版にしてくれとまでは言はぬ。せめては何人かゞ一度ぐらゐは讀んでから、燒くなら燒くやうに用意するだけは公の義務である。小鳥の少ない東京大阪の町などでは、本を食料にする羽蟲が最も繁殖する。蟲干が不可能で水分を含むから、一層食べてうまいらしい。大地震はもう無くとも、遠からず塵になる見込ばかりは確かにある。そんな事には責を負はぬ番人が、たゞ固苦しく今は之を管理して居る。

だから早く寫本法を設けて、第一には速かに所在を登錄し、第二には一定の條件を備へた者には樂に見させ、第三には內容を判別して、あるものは副本を作らせ、他の若干はむしろとちらから力を入れて、短い期間に利用させてしまふことにせぬと、以前は有つたといふだけでは學問にも何にも沒交渉なことに歸してしまふ。

七

さうした仕事は到底個人の企て得る所でない。えらい先生はよくけちを付けるが、佐村八郎氏ほどの辛勞でも、今日たれが出て志願をしようか。實際『國書解題』の在るおかげで、讀まずともよい本を讀まなかつた、時間の節約は偉大なる恩澤であつた。强ひて不足を言ふなら、あの仁が長命して、續篇を出し得なかつたのが惜しいとは思つて居る。

目的がちがつたのだから是非も無いが、實は解題の最も必要なものはあのほかにあつた。日本人の一つの癖で、とても內容を暗示し得ないやうな、氣取つた書名がよく採用せられる。その中でも我々を惱ますのは隨筆といふ曲者であつた。當節の隨筆は第一に才人の事務であり、殊に印刷になつてから初めて名を知るから、少なくとも出版屋の、安心し得た程度の本といふことが知れるが、昔のは一律に外形上の珍書だから判別に困る。天寬化政といつた太平の世に、紙は安く豪放な遊戲は費に堪へぬので、江戶でならば御役の御家人や法師、地方でならば御隱居さんといふ階級が、ほとんど後世の本好きをからかはん爲かと思ふやうに、競うてそんなものを殘してくれた。春風堂とか秋月樓とか、よつぽど考へ

て付けたやうな家號の下に、隨筆と書いた本を八十卷も百卷も殘してくれた。

昔も木好きは筆まめだつたと見えて、今ならアンダーラインといふ程の感興を、すぐに書拔いて我隨筆にしたものが多い。短篇の小說といふ智惠も便宜も無い時代だから、これが先づ最も手輕なかつ無害なる著述であつた。中には『用捨箱』とか『玄同放言』とかいふ刊本の隨筆を、根氣よく十枚も二十枚も寫すのだから閉口する。

伊勢貞丈などの著述は一番多く書拔かれて居る。明治の初年に何處からども無く、そんな氣樂な隨筆が幾組も出た。それに勝手な好い標題をつけて、とぼけて賣込むことが古本商の流行であつたらしい。だから、うつかりと本の名を聞いて飛付くことは出來ぬ。しかも全部が始めからしまひまでそんな愚なものなら見切つてもよいが、大抵はその合間々々に、耳で聽いた珍らしい話とか、たま〳〵知つて居る特殊の知識などが、何の斷りも無しにはさまつて居たり、あるひは同じほどの無名氏でも、心がけがよく久しい間、傳ふるに足るものばかりを、選んで書いて居るのだから、何とも以て始末がよくない。我々仲間の出來さうも無い企てゞは、第一着にかういふ雜駁な古い寫本の中から、殘す價のある分を選り分けようとして居るのだが、果して思ふ通りの途が開けるかどうか。活版になれてしまつたこの頃の人に、書き本を讀んでもらふことが、もう大分困難になつて居る。

（「東京朝日新聞」大正十四年十月十一日、十八日）

新傾向

近年の禁書政策が、寧ろ一種類型ある文籍の流行を促す嫌ひありしことは、今より振返つて見ればほとんど否む能はざる事實であつた。一部の新言論の抑制せらるゝといふことは、往々にして讀書子の注意をその方面に引つけ、やゝ不正確なる模造品の必ずこれに代つて

て付けたやうな家號の下に、隨筆と書いた本を八十卷も百卷も殘してくれた。

昔も本好きは筆まめだつたと見えて、今ならアンダーラインといふ程の感興を、すぐに書拔いて我隨筆にしたものが多い。短篇の小說といふ智惠も便宜も無い時代だから、これが先づ最も手輕なかつ無害なる著述であつた。中には『用捨箱』とか『玄同放言』とかいふ刊本の隨筆を、根氣よく十枚も二十枚も寫すのだから閉口する。

伊勢貞丈などの著述は一番多く書拔かれて居る。明治の初年に何處からとも無く、そんな氣樂な隨筆が幾組も出た。それに勝手な好い標題をつけて、とぼけて賣込むことが古本商の流行であつたらしい。だから、うつかりと本の名を聞いて飛付くことは出來ぬ。しかも全部が始めからしまひまでそんな愚なものなら見切つてもよいが、大抵はその合間々々に、耳で聽いた珍らしい話とか、たま〳〵知つて居る特殊の知識などが、何の斷りも無しにはさまつて居たり、あるひは同じほどの無名氏でも、心がけがよく久しい間、傳ふるに足るものばかりを、選んで書いて居るのだから、何とも以て始末がよくない。我々仲間の出來さうも無い企てゞは、第一着にかういふ雜駁な古い寫本の中から、殘す價のある分を選り分けようとして居るのだが、果して思ふ通りの途が開けるかどうか。活版になれてしまつたこの頃の人に、書き本を讀んでもらふことが、もう大分困難になつて居る。

（「東京朝日新聞」大正十四年十月十一日、十八日）

新傾向

近年の禁書政策が、寧ろ一種類型ある文籍の流行を促す嫌ひありしことは、今より振返つて見ればほとんど否む能はざる事實であつた。一部の新言論の抑制せらるゝといふことは、往々にして讀書子の注意をその方面に引つけ、やゝ不正確なる模造品の必ずこれに代つて

續出するものを見たのである。それと同時に健全なる指導者と稱する者が、力に限りあつて全般に眼が屆かず、主として平凡をもつて安心の極意とせんとした結果もまた現れて居る。機敏なる出版業者等がその將來の計畫を立てるために、右二つの傾向を利用したのはやむを得ぬことであつた。

數量の一點においてこそ、日本現代の刊行物はあるひは世界に誇示することも出來るであらうが、その種類の乏しくまた偏して居ることは話にならぬといふ程度のものであつた。讀書子の選擇は結果において、常に必ずしも自由とはいはれなかつた。ところが兩三年來の大量生産組織は、意外に速かなる進展の極度に到達して、もはや有るだけの舊書凡書を世の中に送り盡し、この上は何を試みてよいかの思案に惱んで居る姿が見えて來た。讀書界の天氣豫報は、新たに探り求められんとして居る。この田舍の隅々にまで行渡つた愛書熱、如何なる小家庭にも本を必要的備品とし、これ無しには日を過ごし得ぬ風習だけを遺して、古い新刊のどし〳〵と古くなつて來たことは、結構なる實狀といつてよい。我々は是非ともかういふ際において、單に在來の何を購ふべきかの問題から、更に今一歩を進めて考へなければならぬ。

いはゆる圓木洪水の一つの大いなる功德は、何よりもこの飽滿の不滿足を味はせてくれたことであらう。今まではこれ程多量なる出版物ならば、ほゞ一代の必要なる知識、一切の學問は漏れ無く包容して居るだらうと思はれて居た。如何なる種類の書卷であれ、これを手にする者は心がけよき青年であり、末には名を揚げ身を起す者と、昔風の人々は考へて居たのであつたが、それが不可能なることは簡單に實驗せられた。第一に人にはそれだけの時間が無い。趣味や境遇の種々なる變化はあらうが、たれにも適用せられる共通の眞實は、讀むことの出來ない書物ほど、無益な邪魔ものは無いといふことであるが、それが今までは經驗して見ることを得なかつたのである。

然るに平易を極めたる供給法が行はれて、久しからずして戸々の小文庫は充溢した。多くの公立圖書館の人知れぬ惱み、如何にして將來の餘席を作るべく、何を無用の書として

棄却すべきかを一考しなければならぬ場合に立至つたのである。この讀書家としての眞の自由なる選擇は、監督官廳の干渉にもよらず、また粗略なる指導者の方針にも基づかずして、各自の主觀をもつて出來るだけ必要なるものに限定することにならうとして居る。その萬人區々の好尙が、自然に需要となつて出版業界に反映することになれば、僅かな年數の間にも、日本の文獻は一大革新を見ずには置かぬだらうと思ふ。

從順なる新刊書の購入者等が、書店の便宜によつて支配せられる時代は、幸ひにして長く續かなかつた。如何に有力なる販賣業者の組合があつて、その團結をもつて無競爭の利益を維持しようとも、讀者にはまた買ふと買はぬとの選擇の自由がある。讀みもせぬものを流行に誘はれて、さういつまでも貯へて行かれるわけが無い。最近やゝ顯著に認められて來た出版物の特殊化、意義あり奧ゆきある研究に向つて、各自手分けをして進んで行かうとする傾向こそは、恐らくは迷へる今日の出版業のために、やがて第二次の運命を決するのみならず、更に昭和新時代の藝術と學問とを、今少しく特色あるものにして遺すことであらう。

（「東京朝日新聞」昭和四年十月八日）

讀物の地方色

町に入つて一番うれしいのは、ちようど其日が市の日に當つて居たときである。靜かな小都會などに於ては、常は旅人は見る人よりも、寧ろ見られる人になりがちで、馴れて居ても落付かぬ感じのするものであるが、市日ばかりは外に氣を取られることが多いので、町では旅の者などには構つて居られず、心置き無く其生活を見せてくれる。遠い近い人間の色々の交通が、商品に由つてよく窺はれる。東京と云ふものゝ隱れた勢力は、却つてと

んな中へ來て氣付く場合が多い。例へば廣告でも陳列でも、曾て見たことも無いやうな雜貨類が、そつとやつて來て幅を利かせて居る。入用が有ればこそ來てゐるのだ。君等の知つた事で無いと云ふ顏をしながらも、じつと見て居ると鼻じろむと謂ふか、見られるのを氣にして居るやうな感じのする品物が多い。

處が奇妙なことには、石鹼や水白粉、さては切地や文房具と云ふ類は、どの地方に往つても大よそ店先へ出しやばつて、先づ買はれたがつて居る品が、大抵一樣であるに反して、書物ばかりは如何にもきつかりとした地方色がある。本屋は旅人には最も遠慮の無い立寄場で、或は繪葉書を捜しに、又は案內記類の有無を尋ねるに託して、自由に入つて見て土地の好みを知ることも出來て、必ずしも市の日の雜沓を利用するの要は無いのみならず、もし單に其地方の讀書家の心持を、想像して見ようとするだけならば、少し練習して見ると通りすがりにも、或は車の上からでも、ちらと一目で感じ得られる程の、濃厚な特色が現れて居るやうに思ふ。

近頃のことでは無かつたが、いやに法律の通俗略解と云ふ類の紙表紙ばかりが、往來近くに飛出して居る町もあつた。又は學校の教科書類の半紙本以外には、玩具との中間に位する幼年雜誌が、獨り目に立つ店もあつた。雜誌類の色なぞも、澤山を集めて見ると自然に一定の調子があつて、愛用者の成長するに從つて、配合がじみになることは、園中の花木が春闌け夏に入るにつれて、桃色から黃になり白になつて行くのと、同じやうな趣きであつた。

又秋の終りに林の奧に入つて見る時のやうな、深い赭に交つた青綠、或は其葉隱れに木通の實などの、重くるしい紫色が覗いて居るのは、一時淺草物などと呼ばれた探偵小說や講談物、武勇譚の類の石版繪の表紙で、昔話はすきでももう語り手を失つた冬の村に於て、新たに物識りを產出しようとする傾向を物語るものであつたと思ふ。

書物の裝釘に國風と云ふものがあつて、例へば佛蘭西のやうに何でもかでも、黃紙の假綴りで先づ出して置くやうであつたら、こんな經驗も六つかしかつたことゝ思ふが、幸ひに

日本では本の形がいつも迷つて居た。背皮金文字が良書の看板であつた時代は短かつた。有島君の本が賣れた頃から、白つぽい色合が考へさせられる本の群を意味するやうになつた。淺黄ならば親切に導くものとか、鼠ならば謙遜に訴へるものとか、細かな差別があつたやうだが、大體に於て店が明るくなり、色合があつさりと、夏の衣類に近くなるに伴つて、讀む人の心もちも既に熟して行くらしく思はれた。年を隔てゝ再び訪ふ町の書物の色が、變り變らぬのを見てあるくことは興味のある經驗であつた。

處が此節では、何でもかでも本は茶色のボール箱に押込んで置くことになつて、少なからず觀光者をまごつかせる。日本では茶は尤もらしい色と、百年も昔からきまつて居るやうで、いか物の素性を隱すにはよい方便だが、一々見別けることは買ふ者にも面倒である。今にきつと此色はたわいも無い濫作に押領せられて、自信のある著述は、又別の表現を採用することになり、次にはこの茶の氣の濃淡に由つて、遠方から地方の文運を鑑別する時が來ることであらうと思ふ。

（「東京朝日新聞」大正十三年一月十四日）

愛書家の立場から

出版界としては此一年間に、正しく復興以上の仕事をして居る。但しそれがどの程度に迄、新らしい生活の力になるかは、別によく考へて見ねばならぬ。我々が劫火の厄難に震駭する餘りに、幾分か書籍に對する古い迷信を喚戻したに乘じて、時として無用の廢紙が、再び塵芥の中から顏を出したやうに、外貌ばかりが如何にも名著らしき種々の四角な物が、おれを大切にせよとのさばり出て、しかも其實價値の有るものと、御得意の取合ひをして居るやうな懸念がある。勿論廣告だけでは少しも判別が付かぬ。何にしても分量が多過ぎ

る。考へて見れば我々は、僅に地震の災から遁れた處で、又書物の大洪水の、門外に迫り來るを見るのである。早く堤防を設けねばならぬ。

一種在來の愛書家の中には、兎も角本ならば大事にしてよろしいと、きめて居た者があつた。さうして其人たちも、もう堪忍の緒が切れようとした矢先に、今度のやうな不慮の事が折々起つては、後には得難い物になるかも知れぬと、思ひ直すことになつたのは不幸であつた。正倉院の文書を見よ。千餘年を過ぐれば反古までが寶である。塙總檢校が蒐集でも、一半は昔の人の愚直な物惜みの名殘では無いか。どんな馬鹿々々しいとんにやく本や婬書でも、今では其時世を知る唯一の資料だと、云ふやうな心持ちが集積して、今以て無益の出版事業を支持するやうである。しかし保存は凡ての出版の目的では無い上に、それだけの手數を要する變つた品は、今は却つて何人も顧みんとはせぬのである。

或は又讀書子の要求の變化を說く者がある。多くの若者は疲れて居る。彼等が書物に期待する所は慰安である。怡悅である。輕くても甘くても、時としては愚劣であつても差支が無いと云ふのである。成るほど彼等には其欲する者を與へねばならぬ。しかも此の如く情を矯めて難きに就くの意なき人々の爲には、一層其効果の適切ならざるものを排斥して、例へば輕味甘味乃至は愚劣味の純一なるものを供與するの必要がある。何れにしても嚴重なる選擇なしに、この出版界の機運に面することは出來なくなつてしまつたのである。

又或はこんな辯護も認められて居る。無用無益は人間の業として已むを得ぬ。有害でさへ無ければよいでは無いかと言ふのである。ところが我々の本を買ふ力、我々の家庭で本を置く場處、殊には百廿五歲は六つかしい人間の一生で、始末し得る分量には必ず限りが有る。外形ばかりの無用の書に由つて、占領せられた部分だけは、我々を良書から遮斷する。日本一の大きな圖書館でも、自然の保存所に役立つ大家の文庫でも、見る〳〵充溢して秦の始皇を學ぶの他は無い。況や我々が鑑別なしに、單に印刷物を愛惜することは、やがてはその書籍を放逐するもとに歸するのである。愛書家にして殊に嚴正なる批評を歡迎せねばならぬ所以である。

本の裝釘の我々を魅すると同じく、書名標題の氣の利いて居るのは閉口の他は無い。此爲に一寸手に取つて、面白さうな本だなと、思ふことなどはもう出來なくなつた。一番困るのは飜譯である。兼て西洋で評判の本だ、よく出たなと急いで買つて見ると、わざとかと思ふ程憎らしいうそが有る。本屋は固より知らぬ顔で、譯者は廣告だけの名士だから、責任の負はせやうも無い。出た書物をいぢめるより、外に手段は無いのである。昔の所謂何々先生校閲や、お名前拜借にも弱らされたが、是には假令一人でも、責めると苦しがる人が居た。實際は恥を知らぬしれ者が、何かの都合で一時篤學と稱せられ、或は天才の肩書を帶びて出て來るのはもつと始末が惡い。しかも之に懲りて餘りに新顔に警戒すると、往々にして本物の世に出るのを苦しめる。さうで無くても流行外の題目、全然豫期せられざる研究は、出版者が無諒解で二の足を踏む。從つて是ほど多い新刊が、兎角どの一隅かへ片寄つてしまふ。全體に書籍を精神の糧などと言つて居る我々が、いつも出來合ひの食事で腹を充さうとするのがよく無かつた。何でも寄合つて今少し料理の方から、獻立の研究をして置く必要があつたのである。

（「東京朝日新聞」大正十三年九月八日）

半暴露文學

粉木廢れて新らしい寫生の必要になつたことは、畫も芝居も小說も同じである。この文學隆盛の時代において、モデルがもし問題にならず、あるひは經濟の生活と、何等の交渉を持たぬやうであつたら、その方が寧ろ不思議といつてよい。然るに一部の藝術にあつては、モデルは旣に完全に職業化し、從つて惡競爭の弊害さへ生じて居るのに、獨り文藝の一種だけが、今なほ自給自足の安きに止まり、乃至は原始的採取の狀態を以て、兎に角に

渡世を續けられたのは自然でなかつた。

いはゆる身邊雜事小說の久しい間あきられなかつたのは、一つには盲目なる愛讀者の、やゝ過分なる寬容も與かつて力があつたが、他方筆者自身もまた、相應の苦勞はして居たやうである。彼等は昔能因法師が、秋風白河の關の名吟を活用すべく、わざと窓から面をだして日に燒けた如く、幾分か故意にその身邊の雜事なるものを複雜にして、種を新たに求めようと努めた形跡がある。多くの放縱なる道義觀の、かゝる身勝手の職業意識から出發してゐることは事實であつて、世上若干の凡庸青年が、その製作の技においては到底企て及ばざるを知りながら、單にこの點のみを模倣して、得々としてゐたのも悲慘の極であるが、當の本人といへどもそれで飯を食ふことは、實はもう餘程大儀になつてゐるのである。

だからモデルが有りふれたる糟糠の妻や、二三の女友との閑葛藤から進出して、徐々にその採用圈を廣めて來た事は、當然の經過といふべきであつた。ひいきの看客はもちろん一通りの好奇心はもつて居る。曾て山東京傳が未來記に豫言した如き、市川白猿住居の場といふ類の一幕物も、興味をもつて讀んでくれる人はあつたであらうが、それを永續させる事は最初から無理であつた。讀書は假に從順で進んでその要求はせぬまでも、見せてくれるならば少しでも新らしい世界を、これが有りのまゝだと稱して鮮明に紹介してくれることを、歡迎せぬはずは無いのである。寫生文學の唱道以來、世人は如何なる人生の片隅といへども、寫すべからず讀むべからざるものが無いことを學んで居る。ましてや菊池寬といふが如き境涯にある名士の、美醜交錯した生活斷片を手に取るやうに見るといふことは、兎に角に一つの御馳走といつてよかつたのである。だから最近のいはゆる暴露文學の如きは、よしや作者の側に何の下心が無くとも、當世の讀書界には打つてつけの事業であり、幸ひに藝術第一主義の論を超脫して、物の價を評定することが許さるゝならば、これは少なくとも今と將來との社會に對して、新らしい知識の供給ではあつたのである。單に作者が感謝せられ豐かに酬いられるのみならず、更になほ一團の大いに滿足する階級さへ

あるのである。

しかもモデルが何等の代價を拂はれずして、勝手に描かれるといふ不平は生產費の問題であつて、讀者の意に介すべき事柄で無いのみならず、更にその描寫が眞相と遠いか近いかも、實はその技能の下手上手ほどに、氣にかけなければならぬ問題では無いのであつた。モデル問題の提出はいつの場合においても、その作品を不當に有名ならしめ、世上の好奇心を倍加せしめ、さうしてその出版業者を滿足せしめて居る。文壇にはゴシツプのお蔭をもつて何だかえらさうになつて來た者も若干あり、自身流言の散布に苦心する者さへあるといふことである。寧ろ色々の隨伴事件が多く起つて、結局事實を精確にすることが出來た方が、無用の迷信を後代に遺さぬだけでも得である。

現代文人たちの生活研究が、從來あまりにも狹隘なる前面を採つて居たことは、自他のために悲しむべきことであつた。故に折角暴露文學の機運が躍進せんとするに際して、不可解なる情誼論をもつてその前途をはゞまうとするはよろしくない。吾人の怖るゝところは寧ろその態度の不徹底であつて、あるひはモデルの用途を限定し、もしくは舊式なる社交法によつて、その必然に暴露すべきものゝ半分を殘すことである。現在の暴露文學の急激なる隆興は、實際は趣味の變遷でもなく、また藝術の進歩では尙更無い。如何に熱烈に眞理の所在を追隨して、これを書き盡すを使命と感ずるものがあらうとも、彼を支援しかつ利用せんとする出版資本團が無く、一方彼等に利用せられることを甘んじて、自家の地をなさんとする意圖が作家に無かつたら、世人の好奇心はこれほどまでに迎合せられず、その弱點はこれほどまでに乘ぜられなかつたらう。ところがこれ等の資本團は、必要とあらばエロにも行き、利益とあらばグロにも行く。決してある限られたる眞理暴露のために、その全力を傾けては居ないのである。近世讀書界の表裏に通曉し、自身また百パーセントにこれを利用し得た人が、忽然として僅か一つのモデル問題のために、拳骨をふりまはしたところで始まらない。それよりももつと讀者を改良して、食はねばならぬ文學者の、襟首をつかまへて書かされるやうな、みじめな現狀を改良する方が順序である。それには暴露

文學の必要が、殊にこの連中のために痛切に感じられる。

（「東京朝日新聞」昭和五年八月二十二日）

婦人雜誌のこと

讀物の確かな選擇が出來る人に取つては、如何に大量生産で安い大きいと言つても、雜誌ほど高くつく讀物は實は無いのであるが、氣が散つて何にでも少しづゝの興味の持てる人たちには、一番强い誘惑は題目が雜多で、總分量の夥だしいといふことであらう。婦人雜誌の記事墮落の、最も救濟し難い點は卽ちそれが雜誌であり、又讀者が婦人であるといふことに在ると認めなければならぬ。

しかし他の一方から見て、この二つの難點は同時に又之を治療の道に利用し得るものであると思ふ。何となれば雜誌は次々に世の中の流行に呼應して、いつの間にか方針をかへて行くことが可能である上に、婦人は又至つて微細なる風潮にも敏感な者で、少しでも「あんなもの」を讀んで居ることが、嘲られ賤しめられるといふことを知つたら、單なる見え坊からでもそれを手にすることを我慢するからである。別の言葉でいふと、私は先輩指導者又は若い女性から敬愛せられる人たちが、この種の雜誌に對する輕蔑の情を表白する態度がまた不十分であると思ふ。

私等の知つて居る限りの可なり廣い社會では、よほど久しい前から內々はどうか知らぬが、少なくとも人の居る中で婦人雜誌類を讀まうとする娘は見たことが無い。といふわけは是は惡い傾向だと心づいた頃から、買つたり寄稿したりしないのは勿論、努めて子供等の見る前で之を賤しむ態度を示し、たま〳〵寄贈を受けることがあつても、封を切らず若くは切つてからすぐに、疊の端の方へ投げ出して舌打ちなどをする。それが自然に制裁と

なつて居るのである。そんなことをして損をする樣な新らしい記事は今の雜誌には有りもせず、稀にはあらうともそれが爲に醜劣なる讀物を寬容しないのである。

ところが一部の女流大家たちの中には、雜誌は無くてはならぬから何とかして改良しようといふやうな考へからか、如何なる見苦しい取り處の無い記事を載せた雜誌にでも、賴まれると喜んで自分の原稿を送り、今日有害だと認めて居る讀物と伍を爲し肩を並べることを厭はない人がある。さうすると自分の最も大切な讀者に、讀ませたくないものを讀ませることになつて、即ち間接には「あんなもの」を承認し、もしくは推薦する結果にもなつたのである。さうして今頃になつてから發行者の戸を叩いて、惡い記事の中止を懇願しようなど丶言つて居るのである。

そんなことをすれば、さては雜誌社に來て賴むより以外には、抑制する手段も無い位强烈な慾望だなと早合點をして、却つて益々力を此方面に集注するかも知れない。彼等は資本經營者だから利にまはると見れば、泣いて拜んでもやはり出すと同時に、もと〳〵惡い主義の宣傳をする氣は無いのだから、少しでも顧みる者が減ずると見れば、どし〳〵他の方面へ進出するに相違ない。つまり改良をすべきものは讀者側の趣味であつて、彼等の與り知る所では無いのである。讀者はばら〳〵で統一も何も無い。之を糾合することは難事の樣に思はれるかも知らぬが、元々こんな流行とても企て丶作つた人は無かつたと同じく、僅かな端緒からでも一般の氣風はかはつて行く。自分等は寧ろこの重要でしかも急迫でなかつた婦人讀物の問題が、此好機會を得て共同の討議に付せらるゝに至つたことを悅んで居るものである。

婦人が特に讀物の選擇に不得手で、人のすることばかり模倣したがることは辯護し得ない事實であらう。しかしそれをいへば圓本に狂奔した多數男子とても同じことで、たゞ彼等は逍遙する花苑が廣く且つ自由であつた爲に、同じ盲探りの中からでも、幾分か身に適したものに遭遇し得たといふのみでは無いか。だから讀書力のある女性に向つて、彼等の選擇の愚かであつたことを責めようとするならば、必ず別に今一層すぐれた讀物を多く且

つ新らしく供給せねばならぬ。そんなら何を讀みましようかと反問せられた時に、忽ち返事に困るやうな狀態にして置いて、あれは無益なものだから見るなとばかりいふのでは、其効果の乏しいことは知れきつた話である。

私等は婦人專用の讀物といふものが、もし多種多樣で有り得るならば、それをも妨げようといふ者では無いが、今日の如き良書の乏しい時代に際して、讀者によつて讀物の類別限界を立てようとするのが間違つて居ると思ふ。子供だけは別だ。彼等は讀みたくても今の國語では六つかしいものが讀めぬのだから、彼等特別の繪本などを買ふのも是非が無いが、其他の部分では、本を見るのは人並になつたことを意味するのである。あなたは娘だから是がよからうと指定しようとしたから「あんなもの」が出來た。此點は青年とても同じことで、よく人は青年讀物などと謂つて、何か特殊のものを作つて與へねばならぬやうなことをいふが、もしそんな流行が一般的になつたら、弊害はやはり同じ歸結を見たことであらう。唯幸ひなことには彼等の讀書慾は、積極的にすぐ其垣根を越えて行くから、今では寧ろ出版物の大部分が、餘りに彼等ばかりの爲に計畫せられることを、氣遣はねばならぬやうになつたのである。

だから我々は若干の婦人著述家には氣の毒ながら、成るべく婦人だけに讀ませようといふ狹い目的の著述を差控へて、この比較的つゝましい讀者の周圍に、無用の垣根を結ぶことを避けたいと思ふ。さうして置いても、おのづから男女の好みは分れるか知らぬが、科學文學何れの方面に於ても、特に男子だけに讀ませるといふ書物は無いのである。雜誌の雜讀がもし一朝にして制止し難いならば、せめて男も女も共に讀み得る樣な雜誌を以て、遁げても遁げても性的記事に打突かるやうな、今日の雜誌の拘束から脫出し得るだけにはして遣りたい。

世間周知の事實は、今日の婦人雜誌の幾つかは、もう何年と無くいつも小さな圓周の中をうろついて、珍らしい新らしいといふ知識が實は至つて少ない。單に舊讀者が嫁に行き親になり段々に代つて來る新人であるが爲に、さうして古い號がどこへか姿を隱す爲に、月

月新らしいものとして迎へられるだけである。折角小學校で骨を折つて文字を解する力を授け、しかも人生に最も意義ある大切な時間を、「あんなもの」に費やさせて置くには、餘りにも此世は多事である。一歩を踏出せば何れの方面にも新興味は溢れて居る。それをただ少しの勞を省いて、今まで指示することを怠つて居たのは、出版者といふよりも寧ろ文筆の人の責であつた。もつと面白い且つ爲になる題目が他に幾らでもあることを信じ得る人々は、先づ自ら起つてこの至つて容易なる競爭に勝つべきであつた。我々は必ずしも人間の弱點のあらゆるものに勝たうといふのでは無い。内證ではこそ〳〵とあんな知識をあさる者はあらうとも、少なくとも公然と之を青年女子が、讀んで差支の無いものだと思ふやうな氣風だけを、先づ第一段には抑制すればよいのである。それだけの判別選擇さへ立つならば、今風の編輯ぶりを續けて行く婦人雜誌は、恐らくは皆破産してしまふだらうと思ふ。

但したゞ一つだけ、優良なる讀物の供給者に注意したい事は、現在の讀者の要求の新らしいものであるといふ點である。婦人雜誌の最も重きを置く讀者は、決して修養のために所謂勉強して書を學ぶといふ人では無い。工場から出て休み畠から還つて休むといふ人たちの、僅かな時間の樂しみに、何か心安く且つ面白いものをと捜して居るものが買つて居るので、さうした慰安の要求に向つて、斯んな結構なものがあるのになぜ讀まぬかと、ひまな年長者の教誡談を押付けようとするのは、是も亦一種の「魚を乞ふ者に蝎」である。勿論この人たちとても志を振起して、力めて心の養ひになる書物を見なければならぬが、少なくともこの場合の注文はそれで無いので、取つて代ることの不可能なるは固より、却つて時としては彼等自身の新らしい境地の開拓を阻碍することにならうも知れぬ。

讀書が自由の選擇に出發せず、心持のちがつた者の判斷を押付けることは、寧ろ禁果の味を微妙ならしめる懸念があるのだから、「家の光」などがもし醜惡讀物を征服しようといふ志があるならば、最も讀者自身の選擇の範圍を廣くし、徐々として改善せられたる彼等の趣味に、應ずるの策を立てるのが第一である。其方法は必ずしも少なきに苦しまぬが、

自分は寧ろ彼等をして、より多く述べ語らしめるのを可なりと考へて居る。日本近世の青年男子の文學には、弊害もあるだらうが活々とした點が認められる。それは何と言つても或時代の投書主義、即ち讀者をして互ひに其好尚を批判せしめたのが、原因になつて居るかと思ふ。さうした婦人雜誌の編輯も、最初は同じことを試みて讀者を引付けたのだが、何分にも編者の趣味が狹隘で且つ低級であつた爲に、終には從順なる多くの女性を、たつた一つの馬鹿げたる題目に閉ぢとめてしまふ迄の、情けない狀態に立至つたのである。

（「家の光」昭和三年十月號）

熙譚書屋閒話

一

いつも斯うして催促を受けて物を書くたびに、僅か五十年ほどの間に一變してしまつた、文筆者流の態度といふものを考へずには居られない。以前は如何にも印刷といふことが容易で無いから、それを斷念して居た人の多かつたのは不思議で無いが、中には我著述のもう一部複寫されて、世に弘まることをさへ豫期しなかつた者がある。大震災の際に大學の書庫で燒けたものゝ中にも、さういふ珍書が幾つかあつたといふ話だ。何月何日の何の刻、一天かき曇つて空より馬の毛の如きもの降ると錄して、其下に小さな紙袋を貼り付け、所謂馬毛樣の物が少しばかり入れてある。關取何某は無類の大男とある條には、當人が賴まれてちやんと手の形を押して居る。斯ういふことが寧ろ或時代の流行でもあつた。よほど我々とは木をこしらへるといふ氣持が違つて居たのである。

その辯標題だけを見ると、賣らうといふ書物もさう格別な相異は無い。と言はうよりも今の人が眞似て見たくなるほど氣の利いた書名が色々と考案せられて居る。此點にかけては全く古人は苦勞性であつた。ちようど二階を建てゝ何々樓の額がほしくなるやうに、又

其文字に若干の風懐を托せんとしたやうに、何を書き誰に讀まれるかを外側からきめてかかつた形さへあつた。漠然とはして居るが標題は全く人を引付ける。是が爲に今までの本道樂が、どのくらゐ無用な刺戟を受けて居るか知れぬのである。

所謂隨筆漫錄の興味は、日本人ほど能く之を理解し、しかも日本人ほど貧しい供給に甘んじて居る者も稀だらうと思ふ。人生の慰問を讀書に期待する人々が、釣られて引掛かつて苦い經驗をしてしまふのは、罪は素よりにせ物の跳梁にも在らうが、一つには斯ういふ内容を明示せぬ好書名が、久しく此方面には流行して居たからで、しかもその最初の使用者には、必ずしも次の世紀の讀書子の趣味などに、妥協しようとせぬ者が多かつたのである。

二

同じ「心の糧」でも、當世の餅菓子どもく飯に比べて、古書には栗や里芋の如く、剝いだり洗つたりしなければならぬものゝ、多いのは確かに事實である。江戸期の雜著類が落葉籠だの竹抓子だのといふ標題を好んだのは、必ずしも謙遜の德ばかりでは無かつた。どうせ出版といふことは思ひ絶えて居るのだから、筆の力に任せて何でもかき集めて置かうといふ氣になつたのも自然であり、一つには又蒐集者の普通の心理に從うて、冊數の積もつて行くのを長命の記念として悦んだのである。

是は一つのやゝ奇拔なる特例ではあるが、懇意の老人に大變な分量の、「かき物」をして居る者があつた。始めてからもう三十年にもなるといふので、ゆかしく思つて借り出して見ると全部が新聞の又寫しばかりであつた。新聞の記事だとても無論馬鹿にはならない。一方では之を見る者が片端から忘れてしまふし、それを除外して居れば現代の社會史は成立たない。たゞ問題になるのは之を公然と書寫して置くことが、果して我々のいふ書籍といふものの定義に、包容せられようかどうかである。

ところが新聞と名の付くものが、未だこの世の中に現出しなかつた時代には、實質の略これと同じいものが、最も主要なる著述の題材であつた。文藝や論策は時過ぐれば忽ち無用に歸する。後世から振りかへつて見て何よりも意義のある文獻は、曾て生活した者の踏みしめた足跡ばかりで、如何に訓へられても其當時の讀者と、同じ心持に感動したり、威壓せられたりすることは我々には出來ない。結局はそれが何等かの遠い昔の事實を、映出して居るといふ點に價値を見出すの他は無いとすれば、直接にそれを有りのまゝに記述して置いてくれた方が、有難かつたといふことにならざるを得ぬのである。明治以來の新聞を書寫した人は愚であつたかも知らぬが、古い時代の著書では、さういふものが次第に勝利を得ようとして居る。

三

水戸で國史を編纂した時代と、今の大學などゝは古書の取扱ひ方がもう大分變つて居る。同じ書いたものを根據とする歷史でも、一方は誰かの書き傳へようとしたものに重きを置いたに反して、此頃ではもう偶然の記錄の中に、出來るだけ多くの暗示を求めて、寧ろ其方から眞相に近よらうと企てゝ居るやうに見える。我々の知りたいと思ふ題目が增加して、それには豫め計畫せられた史料が得られないからでもあらうが、一つには又中間に餘計な解說者を立たせずに、自分で親しく知らうといふ念慮が、追々に萌して來た爲でもある。それには今日の所謂ジヤーナリズム、何が目的でさう色々の事を書いて置かうとしたかを、察するに苦しむやうな前代の健筆家が、單に事實の新らしさ珍らしさの興味から、思はず知らず書いて見たといふ寫本類が、餘りにも我々と緣の遠い片隅で、次第に滅びて行かうとして居るのを、患へなければならぬ理由があると思ふ。

日本人の話ずきは、近年流行の座談會などにもよく現はれて居るが、その一つ前にも趣味の話、個々の專門家の追懷談といふやうな形で、普通に知られなかつた事實が傳へられ

て居る。肩が凝らないでしかも印象が永く殘り、二度讀んで見てもやはり面白いものが多く、正直なところ明治以來の文獻としては、是ほど多數の人に愛好せられたものは無いのだが、惜しいことにはその僅か一少部分の他は、新聞や雜誌に出たきりで、もう其年月も多くは不詳になつて居る。しかし此分は兎に角人に見られ、少しは記憶されて世にも傳はり、搜せば又何處かに有るかも知れぬが、ひどくなつてしまつたのは祖父以前の談話である。雜書がまだ少なく燈火がまだ暗く、夜の時間がたつぷりとあつて、人が律義で作り話を好まなかつた時代に、あれほど熱心に聽いたり聽かせたりして居た話が、散つて悉く空中に消え去つたといふことは、當り前だとは思へない文筆事業の一失敗であつた。

四

稀には古人の中にも、此點に用意を施した人もあつた。たとへば津村正恭は百年以前の富家翁の中でも、殊に驚くべき筆豆であつて、その集錄にかゝる片玉集の如きは、一人では所藏も困難な程の大叢書であつたが、別に耳聞を手記した『譚海』を存して居た爲に、近年活刷になつて是だけは弘く讀まれて居る。依田學海にも同じ名の著があつて、それが世に出た當時は此方ばかり評判になつたが、是は漢文であり又都市の事を主とする爲に、今讀んで見ての面白さは、到底圓氏の『譚海』には及ぶべくも無いのである。江戸人の筆記には鈴木桃野の『反古の裏書』といつたやうな、噂や出來事を書き留めたものも若干はあつても、世間が狹いので受賣の重複が多く、又蔭口や人物評などの、皮肉なものが珍重せられ易かつたに反して、此書は著者と緣の深い秋田領の話を始め、成るべく旅をした人の遠方の話ばかりを集めようとしたのは、心有つての所業かと思はれる。町の讀書子等の田舍の事物をゆかしがることは、あの頃は今より一層痛切であつたのだが、聽き上手が居なかつたか、話す者が斟酌をしたか、いつも少しばかり變な話のみが傳はつて、却つて段々に地方の概念を引き歪めてしまつたのは、現在の新聞通信も同じであつた。

だから書物を當てにして、古い事でも探つて見ようとする者は、よほど氣を付けぬと町ばかりの通になつて、村の生活興味などは御留守になつてしまふ。少し大きな圖書館で分類をして見れば直ぐにわかることだが、著述の中央集權は今に始まつたことで無く、しかも版にして世に弘めようとする努力が、主として遊里とか劇場とかに關聯する題目へ傾けられて居た時代さへ永く續いたのである。數の上から言つても文筆に携はる者が、田舍は都會よりも少なかつたであらうが、其上に彼等の一半は意味も無く町の人の好尙に追隨し、又他の一半は全然流布といふことを念頭に置かずに、吃々としてその書寫の業を續けて居たのである。それが今日の樣な目錄搜索、本は面白いものなら自然に誰かゞ讀んで、知らせてくれるだらうと待つて居る樣な世の中になつて、隱れて滅びて行つたのも不思議は無い。私たちも愈ゝ此方面に斷念して、別に何等かの手段を講じなければならぬと考へ付くまでには、本の爲には相應な苦勞をして居る。地方を文獻の埒の外に置くまいと思つて、色々の計畫を立てゝ見たことがある。それはちつとも成功はしなかつたが、まだ今日でも丸で中止はして居ない。此次には折があつたら其實驗を、もう少し話して見たいと思ふ。

（「書物展望」昭和六年十二月號）

雜記

オデオンの向ひのリュキサンブール苑の下の角のフラマリオンの小賣店を訪れて、始めて佛蘭西人が本を愛する國民なることを知つた。文學は畢竟する所香爐であり絹の褥であるのに、微々たるショコラをさへ銀紙に包まうといふ國から、濡れたら融けさうな漉返しに印刷したものが持運ばれる。如何に撫でたり摩つたりして見ても、作者の心持が安々と受取れよう筈がない。それをあわてゝ飜譯して賣つて、夢ほども元のかをりが留まつて居

汚損資料

たら奇跡である。私も實はこの淺草紙のアナトールフランスなどを讀んで、彼の解脱ぶりのあまりにも徹底したのを訝つた者だが、心付いて見ると我々の味はつて居たのは糟であつた。水に映した影よりも遠いものであつた。作者が悅んで世の中に留めようとしたものは、別に何百かのそれは美しい、さうして高い本があつたのである。勿論金があつてもそんな物は買ふ氣はないが、自分は兎に角に藝術の書物には、計畫せられた最初の形態のあるものだといふことを知り、かつは今まで我々の文庫が念掛けて集めて居たのは、相撲を新聞で見る程度の享樂であつたことを覺つて、却つて安心をしたことであつた。

そんなことを言ふわけは外でも無いが、書物の道樂だけは各ゝ國風を守つて、無茶な國際主義に荒させたくないからである。以前此[illegible]に人眞似の盛んであつた時代には、我々も出稼人やマドロスの連坐を食つて、書籍の殘酷なあてがひ扶持を忍ばなければならなかつた。所謂植民地版の惡趣味は、他に比較すべきものが無いために有難がられた。今では注文を出して彼等の案外とするものも多く買ふが、それでも外國へ出て行く本は凡そきまつて居る。自分等の家などは話にならぬが、一廉嗜みのよい人の蒐集でも、をかしな不調和が多くていつになつても本棚が落付かない。量を貪る古本商の店でも、斯うは無からうと思ふ亂雜さがある。それでも形をきめ製本をして渡す國のはまだ我慢が出來るが、その間に挾まつて黄や青のべら〳〵した佛蘭西の紙表紙本が、いつ迄も埃を白粉にして氣取つて居るのはうんざりさせられる。永い未來の書齋の平和の爲早くこんな物を始末する習慣と、之を一括して保管する高野山の骨堂のやうなものがほしい。さうして一方には單に整理の便宜とは言はず、進んでは著者との精神交通を圓滑ならしむべく、もつと多くの要求を自國の出版業者に向つて提出しなければならぬと思ふ。現在でも中味も外形も一切が彼方任せで、買へと命ぜられると謹んで買つて居る。幾ら出來合ひが原則の商賣でも、菓子屋だつたらとてもこれでは成立つまい。

（「文庫」第一號昭和二年十一月號）

『日本志篇』に題す

日本のやうに文獻の中央統一が、完全に行はれて居る國もちよつと類が無い。それが今日の從順なる購讀者と、都人の講說なら何でも受入れようといふ氣風の、根源であると迄は斷言し難いか知らぬが、少なくとも地方の著述、それを張合ひにして活動すべかりし地方の學問が、お蔭で埋沒したことだけは確かである。私はそれが不平であつて、しかも匡救の手段を知らぬ故にたゞ默つて不平であつた。どうかして此本に似たやうな目錄を作つて見ようとして、失敗したことも何度かあつた。實際また私ほど、地方の刊行物を利用して多くの恩惠を受けた者も尠ないのであつた。ところが巖松堂の主人はいつの間にかこの實情を知つて居る。さうして組版の元刷を見せて序文を書けといふ。その位慧眼ならば此本の刊行も必ず時を得て居るであらう。

以前私は何度と無く、本道樂が古本屋を開業するのと、本屋が本道樂になるのと、何れがより多く世の中の爲になるだらうかを考へて見たことがある。どちらも大したことは無いと言ひ切る人はあるまいが、一方は『觀潮樓偶記』にある巴里の學士院門前のアシエンドル先生の如く、追々貧乏して小さくなつて行くことはほゞ疑ひが無い。之に比べると巖松堂主人なる者の近年の進況はどうであるか。彼はつひ此間まで、法律經濟界の都人の著の、ハシリにばかり目を耀かして居る出版家であつた。それが系統を立てゝ微細無力なる地方の古本を分類した此樣な所藏目錄を、世に誇り示すだけの腕になつたのである。もし國內の古本業者が、みんな波多野君たるを得るものとしたならば、以前の私の比較研究などは、甚だ目先の見えぬ話であつたといふべきだが、負惜みをいふならば此人には、やはり獨特の技能と餘分の親切とがあるからであらう。

『日本志篇』に題す

其上に彼は又地の利を得て居る。既に一廉の新刊書肆として門戸を張つて居ることも其一つであれば、何時賣れるといふ當ても無い雜書どもを、近い鄕里の土藏に運んでしまつて置けるといふ事も一得であつた。斯ういふ大掛りを以てすれば、勿論國中の本好き等を煙に卷き、行く〳〵成るべくは此店へ來て買ひ、來て賣るといふ人を引付けることも出來るわけで、それが又我々素人目錄家どもの、匙を投げなければならぬ長處であると思ふ。

私は前年或大文庫を整理する際に、大體此書目と同じやうな順序で、地誌其他の地方刊行物の分類をして見たことがある。古い頃だから數量も遙かに是より少なく、第一つまらないと思つたのは、斯うして置いても自分以外に、誰がいつ取出して見てくれようかといふことであつた。自分しか利用せぬとすれば、もう早掲載したくも無いものが色々と現れて來る。つまりは溜り水だからすぐに停滯を感ずるのである。之に反して本屋の目錄はさらさらと流れる川である。從つて古臭いものにも新らしい光を與へることが出來る。さうして假に今買ふことが出來ぬとしても、讀者は斯ういふ書物が手の屆く所にあるといふ心安さを以て、始終其紹介者に對する親しみを持つのである。勿論其中には本道樂の本性から、實は永く置きたいものも若干はあらうが、どうか折角見付けたものだからといふ愛惜の餘りに、あまりに高い賣價を付けて、事實上の親引きをしないやうにして貰ひたい。お客も嬉しがるのみならず、それが結局は又店繁昌の基であらうから。

（昭和三年八月）

古書保存と鄕土

古書保存會に對する人々の期待要望は、固より萬人一樣では有るまい。從つてもし不幸にして會の資力に限りが有るとすれば、則ち緩急先後の問題がやかましいことであらうと

思ふ。自分一箇の注文を言ふならば、會の事業は成るべく普遍的であつてほしい。則ち二三の珍籍の完全なる保存、或は頗る原形に近い複製などを企てる前に、先づ以て弘く古書の所在目錄を編纂して貰ひたいものだ。勿論其第一着手としては、古書の中で保存の必要有るものと無きものとを區別せねばならぬ。是が中々の大事業である。其分堺線については必ず紛々の說があることだらうが、自分などの考へは簡單である。保存と云ふからには放任して置けば亡くなつてしまふ虞のあること、是が一つ、亡くなつては困ると云ふこと、是が二つ、此二つの外に標準は無いやうに思ふ。尤も右の第二の點は人によつて見込が違ふだらうが、幸ひに會であるから會員の多數で極めてしまひ、其他は個人の勝手に任せてよからう。此春出た書物でも古本屋に列べば古書だ。しかし古本屋にある位のものなら、其保存に會の力を須たぬ者が多いであらう。刊本は近世のものは先づ以て我々の會と交渉が無い。所謂古版物と稱する部分に對しても自分は稍氣樂なる觀察をして居る。仔細あつて絕版となつたやうな僅少の例外はさて置き、其他は假令五十部でも七十部でも、複製し頒布せられたことは確かである。卽ち人こそ知らね亡失の虞の比較的少ないものだ。次には偏見か知らぬが前代の刊本には、其當時既に著述の目的を達してしまつたものが隨分多いやうだ。亡くなつても困らぬとは決して申さぬが、先づ〳〵差當りは他の古物保存會に御任せして置く位で宜しいかと思ふ。卽ち古版物は既にその方面で十分貴重視せられて居るやうだから安心である。

斯く說き來れば、我々の會が世話を燒かねばならぬものは、主として寫本と云ふことに歸するが、是にも亦段々の分別を要とするやうである。同じ寫本の中でも、所謂稿本と傳寫本とは、到底二通りの取扱をせねばならぬ。後者は言はゞ出版の代りであつて、中には江戸期の地方物などの如く、何か公刊し能はざる理由があつて書き本のみを用ゐたが、流布の程度に於ては却つて尋常印刷本よりも遙かに盛なものがある。人の手の廉價であつた時代には、塙氏で續類從の寫本を出したやうな例は何程もあつたらしい。古書新刻の事業が追々起るにつれて迷惑をしたものは此方面に多いやうだ。尤も紙や筆が大いに古い爲に、

汚損資料

堂々たる版本が行はれて後も、敢て國寶的威嚴を失墜せぬ者も少ないとは言はぬ。宮内省などは今でも熱心に『六國史』の異本を採訪して居る。新たに一古寫本が現れたとすれば、いつの世にも遼東の豕として輕ぜられはすまい。それに學問が近頃飛んだ精確になつた。分り切つた箇條でも異本の對照を怠つて置くと尻が來さうでならぬ。さうして活字本には言譯の立たぬ誤植が有つて困る。殊に字體書風などの研究に勞苦する人に取つては、古い物には平凡と云ふことが無いと云ひ得る。但し單に稀少と云ふ點が珍重の理由であるならば、是亦古物保存の領分である。

次に稿本又は未刊本と云ふ部分に於ても、我々の熟慮を要するものがある。此には先づ著述と云ふ語の定義を明かにして掛らねばならぬ面倒があるが、文字は同じでも「書物」と「書き物」とは範圍が別で無ければならぬのに、總體日本では「書き物」が書物に早く成り過ぎる。既に一部の書物と言ふからは、それには統一が無ければならぬ筈である。果しも無く書き續けて居る中に、どの點で筆を中止しても、「へえ書物」と云ふわけには行くまいと思ふ。少なくとも著者又は編者の志に、纏める整理すると云ふ要素が無ければ、帳面に表紙を附け、反故を綴ぢ合せたものと區別することが出來ぬ。然るに此約束を夙にぶち毀したものは、近代の所謂隨筆であつた。隨筆は恐らく昔流行した謙遜なる書名の一種で、相應の見解あり主張ある書物も、是は例のそとはかと無く根無し言を書き列ねたのだと卑下した意味であつたのを、後には文字通りの無責任なものを差出しても好いやうに考へる名聞家も出れば、金のあるまゝにそれを出版した者さへある。殊に我々に取つて迷惑千萬なことは、其隨筆の二字の上に何々樓とか何齋とか氣の利いた雅號をくつ附け、開いて見ると帳面よりつまらぬものがあることである。帳面ならば凡そ系統があり、其中から一貫した題目を把へることが出來るが、手當り次第に新古の書物を拔書きして、何々隨筆などとしてあるには誠に困る。自分は曾て内閣文庫を整理する際に、此類の雜抄ものを普通の著述から區分するにえらい骨折をした。保存會の幹部諸君に於ても、何とぞ題箋に絆されぬ用心をせられたい。

汚損資料

全體隨筆と云ふ者には概して保存の價値あるものが少ない。『松屋筆記』のやうな有名なものでも、自分の文庫の藏本に由つて何卷何丁目を揭げた抄錄が多い。分類もして無ければ綜合もして無い。徒らに我々孫引學者に調寶がられる迄である。況や碌な本も無い田舍に居て、『井蛙抄』など〻云ふやうな本を遺した人は、實に古書保存家の御迷惑である。兎園會時代の隨筆家なども、概ね一箇の珍聞を各自の筆記に持込んで、終に今日の汗牛充棟を促進したものである。自分は羹に懲りた結果が、在江戸老人の傳などに筆錄百何十卷あり家に藏すなどあるを見る度に、しみ〴〵と保存の難事であることを感ずるのである。此種の弊は察する所、東都に於て最も顯著であつたらしい。其所以は此地方に住んだ人が、書き物を爲すべく最も閑で、之を尊重すべく最も物好きであつたからである。田舍は廣い割には文字の人が少なく、又書くべき題目が區々であつた。それ故に今なら新聞の三面のやうな記事を、多人數引張り合うて重複させるやうな虞が少なかつた。成書の抄錄を事とした只の筆豆は別として、苟も志あつて書を作る段になると、常套に追隨するの批難を受くるものが少ない。尤も都會に居る人でも、例へば津村正恭の『譚海』とか、伊藤東涯の『輶軒小錄』などのやうに、特に人の談話を聞書するに力めたものは、多くの場合には新味がある。これが外に同趣味の者も居らぬ村住で、右樣の心掛を以て筆を執つて居たとすれば、假令時々の筆のまに〴〵であつたとしても、必ず獨立して保存を要求する理由がある。況や鄉土の狹い區域に於て舊事を探討し、又は天然の事物生活の方法等に思を凝し、一部の書を纒めるの志を以て永い年月を費したとすれば、其書の價値は小さいと言はれぬ。然るに此類の田舍學者の著述は、古書の中でも最も湮滅し易いものである。子孫又は周邊の人に同じ志の者が繼いで起りにくいこと、當時も歿後も外界と交通の少ないことなどがまた る理由で、單に生涯の辛勞が長持の底に沈淪するのみならず、中には其人有りきとも傳へられぬものが多い。舊家門閥は近年比々として退轉する。若い人の考へは保守で無くなつた。此間に僅かに遺つて居る無名の學者の著述である。我が古書保存會でゞも世話を燒かねば、誰か又昔を訪ふ者であらうぞ。自分は必ずしも會の力を此點に專にし玉へとは言は

ぬが、もし假に限り有る力を先づ施す途を擇ばるゝとすれば、何とぞ今まで所在の知れぬ古書の所在目錄、殊には一つしか無い稿本の行く〳〵亡び去らんとする者を取留める方に掛つて貰ひ申したい。複本の作製も勿論急務である。刊行會の手に合はぬ一地方の著書などは、筆工を以て版工に代へねばならぬかも知れぬ。自筆本で無ければ大切で無いと云ふやうな骨董癖は斷念すべきものであらう。しかし複製の事業は中々急に普及しさうも無い。是は會員中の篤志者にも分擔せしめられて宜しからう。自分なども先年來『諸國叢書』と云ふものを始めて居る。即ち地方無名氏の遺著の稿本で傳寫の少なさうなものを、一部づつ寫して行く仕事である。もう早三四十部は出來た。其目錄は機會あらば本誌に出しませう。幸ひに諸君援助の下にほゞ全國の各部に亘つて周到なる蒐集が出來たら、或は古書保存會の一員たるに耻ぢぬことになるであらう。

（「典籍」大正四年五月二十日號）

鄉土叢書の話

一

此夏は遠野に出かけて、伊能先生の記念學會に參列した際、縣教育會の折角の御招きを受けて、自分等の學問上の意見計畫をお話し申す機會を得たのだが、毎日朝が早いので大分疲れ、其上に支度が足りなかつた爲に、十分の感興を以て東北研究の未來に對する希望と樂觀とを談ずることを得なかつた。いつか折があつたら改めて思ふ所を書いて見たいと、二三の友人にも話して置きながら、餘り問題が多岐である爲に、漫筆にもせよ何れを先にしてよいかに迷うて居た。ところが今度又岩手毎日に、小原敏丸君の珍らしい寄稿を掲載したのを見て、それならば一つ目下計畫中の『南部叢書』に關聯して、自分が千代田文庫整

理以來の經驗を語り、殊には地方に久しく埋もれたる篤學者の遺業を、どうすれば最も滿足に顯揚することが出來ようかといふことを、志あり且つ同情ある諸君と共に考へて見ようといふ氣になつた。右叢書の事業に、今更提灯持の必要なきことは誰でも知つて居る。自分などは寧ろ岩手縣の愛鄉心が無用に鼓舞せられ、或は記念碑式光榮に熱中する餘りに、公平に古書の價値を鑑別すること能はず、乃至は保存の眞趣旨を閑却する人の多かるべきを懸念し、この際若干の苦言を呈して、關係者の省察を願はうとさへ考へて居るので、たゞ之に對する民間學徒としての自分の立場が、頗る岩手毎日子等の是認するらしき小原君のそれと、相異して居るといふのみである。

二

叢書覆刻の事業は、過去既に數十年、將來に向つてもなほ當分の間、可なり大切なる日本の文化運動の一つとして續くと思ふ。東西國情の差異はこんな點にも窺はれるのだが、米合衆國の如きは勿論の話、歐洲の諸舊邦に於てすら、ちつとも此の如き問題を討究する必要は無かつた。史學が追々にあたらしい方面を拓いて、いはゆる文書記錄類の利用は盛んになり、今までは單に骨董的珍寶として、村々家々に保存しただけのもの迄、それ〴〵學問上の意義を認めて、精細なる研究に沒頭して行く者が多く、殊に寫眞と製版技藝の發達した結果、日本などではまだ困つてゐる原形複製、例へば裏にも入用な文書があつてまぎらはしいもの、削つて再用した羊皮紙などの、前の記錄も幸ひにして薄々と殘つて居るものなどが、もう至つて容易に何れの大學文庫でも、見ようと思へば見られる樣になつた。さうして其數量の如きは各國とも、日本の何倍何十倍といふくらゐに多い。それは主たる原因が文字を解する法師たちの、夙に村落の俗務に干與して居た爲で、我邦では人別帳は近年のものばかり、水帳取帳の顏も江戸期以來のものが稀に傳はるばかりで、日記などの古いもの〻非常に少ないのは、戰亂火事洪水の爲もあらうが、一つには事態が外國とは反對

であつたからだ。

しかし是は主として帳面證文といふやうな、せまい意味の古文書だけの話で、寫本卽ち書籍として殘す目的の下に著述又は編纂せられたもの、最初から學問のため智識のため、後世人の判讀を豫期して居たものに至つては、恐らく日本の如く豐富な國はどこにもない。それ故にこそ此問題が、我々學徒の中に大切であつたのである。日本を知る爲には、少しくその事情を考へて見る必要がある。西洋でも僧院の奥などに引き籠つて、生涯を經典の註釋に費した人の中には、一部しか無い大量の寫本を遺して去つた者も往々にしてあつたが、是とても信徒の力で、死後次々に版にしてしまつた。今頃まで地方の片隅に、無名の寫本として僅かに傳はり、湮滅の危險に瀕して居るものなどは甚だ少ないのである。是には中世の製紙技術が、東アジアから敎へられたといふ位で、用紙の無暗に貴重であつたことも關係して居るだらうし、印刷に活字の便法が早く發明せられて居た爲もあらうが、又一つには學問が久しく民間に入らず、著述といへば非常に重々しく考へられ、其完成と流布といふものを、二つに分けて想像することの出來なかつた氣風に基づくもので、今日に至るまで、西洋人の中には我々の樣に、字を書いた紙を綴ぢて置けば卽ち本だといふ如き、無造作な考へ方はまだ無いのである。衣食住日常の生活にも、この東西の相異は一貫して認められる。淡泊無慾と謂ひ、知足安分などといふのも、其一箇の表現に過ぎぬ。勿論深思熟慮の後でないと、どちらがよいかは決定し得られぬが、少なくとも右の東洋風は成行きであつて選擇の結果ではなかつた。書物の一點に付いて考へて見るならば、始めから出版を斷念しても著述をする者が多かつた故に、西洋の如く學問が古典と中央文學のみに集注せず、地方の學者の辛苦の收穫が、或程度まで世に傳はり同胞を益し得た。が又それと同時に、書籍の價値優劣の判斷が非常に必要なこと、今日の大量生產の廣告販賣時代と異なる所なく、單に寫本だから古いからと謂つて、うつかり隨喜することは出來なかつたのである。現に帝國圖書館の如きも、無益嵩高の寫本の爲に苦しめられて居る有樣だ。

三

本は勿論出版をして置かぬと、恩惠も汎く及ばず、著者の功勞も世に認められない。誰しも自信ある文章を書き殘す以上は、之を上木することを希はぬ者は無い筈だが、さて我我の祖先はあきらめも早かつたのである。以前の出版の困難は、單に多量の山櫻の老木を伐り倒して、其材としなければならなかつた爲のみでは無い。此材が如何にも柔らかで百部も刷つてゐるうちには、もう最初のものゝやうに鮮明な氣持ちのよい本は出來なくなる。塙保己一の頃には大分其技術も進んだのだが、之でも獻上した紅葉山文庫の初刷と、町に出てくるものとを比べると非常な相違である。それでゐて精々五六百も刷ると、もう彫り直しを試みなければならぬ。其上に頒布の方法が今のやうでないから、僅かな部數でもすぐに賣れ殘り、資本事業としての危險は却つて多かつたので、到底地方に住む著述家たちの、相談相手でもなんでも無かつた。

さういふうちにも都會の趣味は次第に流行して來て、自費を以て出版しようとする道樂者が現はれた。門人や知友の尊敬を拂ふ人々が、進んで其損失を分擔したなどは、實になつかしい好記念であるが、情無い話には越後などの富家翁には、人に賴んで代筆をさせたものさへある。併しこのお蔭で現存の文獻の、方面と種類とを變化させ、豐富にしたことは爭はれぬ。殊に中以下の諸侯家に此趣味が入つて、各藩競爭して美本善本を刊行させたのは結構であつた。藩はむかしの學問と好尙との一中心だつた故に、其批判選定も概して正當であり、お蔭で有用無用の目標も立ち、學者の奮發心を刺戟したことは確かだが、奈何せん緣故の乏しい田舍に住んで、おまけに根氣と物ずき以外に、自ら賴む所の少なかつた人々には、時流に迎合する樣な方法も無く、又試みようともせず、其上に自費刊行流行の結果、まじめなものは屢〻營利書肆との對談が企てがたくなつて、寧ろ例の東洋流の思ひ切りを以て、最初からそんなことを考へず、漠然たる未來の中に、今日の如き文運の興

汚損資料

隆を期待するのほかは無かつたのである。幸ひにして紙は近代の地方産物で産地だけは價も低く、時間だけは社會組織の然らしむる所、彼等の多數者には存外に豐富であつた。我我の所謂筆豆な篤志家は、つまり斯ういふ狀勢のもとに、日本には輩出したのであつた。

四

但し學問の普及と智識愛、力ある者は世を益すべしとする理想が、文字階級の間に成長しなかつたならば、とても此種の目前の報償なき勞作に、費される生命は多かるまじき道理である。之に向つては背後に在つて著者を尊重し推服し、其志を遂げしめたる凡人の貢獻をも認めなければならぬ。そこで自分たちは先づ第一に、斯ういふ篤志事業の地方的分布といふことを考へて見たのであるが、京畿地方の如き交通の衝にして、學問のあれほど自由であつた土地が、其割に遺跡に豐富でなかつたといふことは、必ずしも容易なる刊行機關が具はつて居て、之を無用にしたからだとも言はれぬやうに思ふ。と言ふのは江戸では上方に比べて書物は一層よく賣れたし、愚劣な小冊子の版になることも日本一であつたが、なほ秦の始皇をして啞然たらしむるほどの寫本類の分量が、維新に瓦解した澤山の舊家から流れ出し、それが震災直前までは市中にも溢れて居た。惜しいやうだが其半ば以上は紙の質がよいといふだけで珍重され、屏風から襖などの下張りに隱れてしまつた。勿論其前に玄人たちの鑑別は經たので、少しでも價値のあるものゝそつと棄てられたものは多く無かつた。即ち此方面に於ては寫本の流行がやゝ過度であつて、例へば旗本の隱居とか、かの『春の日』の連句にある

表町讓りて二人髮剃らん

といふ類の、飯米には事を缺かず、さりとて無暗に出あるいては物がかゝる。まア書き物などが無難な御道樂と認められた人が、何等の天分も無く又識見は無くとも、人竝世間竝に家の隨筆の、冊數のふえて行くのを喜んで居た結果であつた。

汚損資料

内閣文庫なども、以前豫算の潤澤であつた時代には、つひ買ひ過ぎるのでよほど警戒をしてゐても、又しても無用の寫本を背負ひ込んだものらしい。それには古本商の不正直も手傳つてゐたと謂つてよい。標題ばかり堂々とした美辭をかゝげ、中は全部有りふれた軍書聞書から、出處を示さずに抄出したものも多かつた。或は同本の始めの三四枚をわざと除いて、あらたに別の標題を附したのもある。此方は買ふ者の不注意としてよいが、中には大部の書の二節三節を繼ぎ合せ、又は書き續けて見たものもあつて、それを發見するには記憶のよい專門家を必要とする。近世の隨筆類を拔き書きしたものなどはわたしにもわかつたが、前任者たちの最も閉口したのは、古いところでは天野信景の『鹽尻』、それから下つては江戸武人の最も尊敬した伊勢貞丈の隨筆などである。この二種の書に異本と稱する者の多いのは、全く斯ういふ事由からであつて、飛んでも無い中程から勝手に寫してあつては、假に麗々と著者の名を書いてあつても、それが重複であるか否かは原本の全部と比べて見なければ分らぬ。況んやそれを隱して筆者の雅號ばかりを出しておくと、受け書りとも燒き直しとも、馴れぬうちは氣が付かぬのである。其癖に江戸では本を大切にし、例へば花柳界の微細な生活まで、古いといへば大人名士等が之を寫し取り、終には近年刊行した『燕石十種』の如く、何人にも見られる程度に流布させて居るのだが、しかも一方には大いなる決心を以て反古の部に突込まねばならぬ寫本がうんとあつたのだ。最初から高をくゝれるとそれでもまだ仕末がよいが、玉石は常に混じ、無意味な抄錄の間に、稀には得がたい新材料が挾まつてゐるので、うつかりとは出來ぬ。要するに日本のやうな寫本國の讀書生が、餘計な辛勞を嘗めさせられることは、地方といへども變りはあるまい。それが叢書刊行事業の、今に於て非常に有効なる一理由である。

五

それでも地方の寫本には、比較的簡便な判別方法がある。即ち非常に中央の學風にかぶ

れて、所謂伊勢貞丈・大塚嘉樹などを珍重して居る人は、概して土地の現象に冷淡である。彼等の多くは御定府卽ち江戸詰であり、町人ならば所謂ハイカラだ。さうでなくとも及び腰の研究では、今日の輸入教授も同じやうに、本元よりも劣つて居たにきまつて居る。地方に在つて地方の事に觸れぬやうな寫本ならば、大體に於て安く其價を見積つても失敗は無い。それが私たちの今までの尺度であり、又其裏から地方學者の地方研究を輕んじなかつた理由でもあつた。

そんなら各府縣に於て古くからある寫本類の、筆者周圍の問題を扱つたものが、何れも一樣に貴といかといふと、それにも更に一段の顯著なる差等があつた。それを詳しく說くには又編述の動機、目的にまで入つて見なければならぬが、それは別にしても、本でも書き殘さうかといふ人の數が、個々の地方に於ても分布の平均せぬことは、全國から見て江戸に閑人の群集してゐるのと同じであつた。文筆は何としても都會のものだから、城下藩中の瑣事までも絮說する者多く、農村の生活を顧みる人がどこでも少ない。殊に年老いた

る律義者には、何々院樣御治世中にといふ類の、懷舊談は普通の辭であつて、さう澤山に逸話の種はないから、こゝでも亦前から傳はつたものを繰り返して、又寫しをする場合が稀でなかつた。故に未刊本の眞價を秤量するには、勿論精讀し比較するに越したことは無いけれども、少し馴れると數箇所を開いて見て、凡そどれほどの交涉を現代の學問との間に持つて居るものかを、察することはむつかしく無いのである。

素より編述者の態度としては淡々水の如く、書きたいから自分は書いて置く、役に立つなら役立てるがよいといふ心持ちの人が多かつたらう。此點は却つて刊本の賣らんかなよりは快く感ぜられるが、一たび之を紹介して世上の公器としようとするからには、永く後代の讀書生の爲に、無用の煩勞を省くべく、むしろ選擇の稍嚴に失するを力むべきである。人の壽命は必ずしも常に事業學問と併行せず、又故人の心情は今よりも悠長であつたために、寫本には屢々未完成のものがある。明瞭に改訂增補を企圖してゐたものがある。其遺志を無にする事は時としては殘忍である。渡邊政香の『參河志』の如きは其一例で、卷次五

十卷に近い尨然たる大部冊であつたばかりに、誤つて之を成書と信じ、鄉里の郡教育會は少なからぬ經費を支出して之を刊行したが、其三分の一は實は荒筋計畫といふまでにとどまり、偶〻書き込んだ個條も他書の抄出に過ぎなかつた。大體にまとまつて居る部分のみを先づ出すか、然らざれば之を補正してやる方がよかつたのである。佐久間洞巖の『奥羽觀迹聞老志』等も幾分か其嫌ひがある。故人の篤學を嘆美し、且つ其埋沒を惜むのは鄉黨の情でもあらうが、著者すら自ら安んずる能はざるべきものを、强ひて引出して他の優秀なる諸篇と伍せしむることは、獨り彼等の本志に反すといふのみに非ず、時としては世の青年諸君を誤らしめ、又他の一方には既に完備したる良書の、眞價を紛亂せしめることになるのである。卽ち叢書の計畫を以て、單なる保存の事業の如く看なすべからざる所以である。保存が若し唯一の目的ならば、特に小原君等の主義に反對して、その簡便なる蟲難盜難の防止方法を、攪亂する必要は無いのである。

六

ところが各地從來の叢書事業には、辛苦して數量の尨大を企圖し、結局其全部を擧げて對社會の効果を稀薄ならしめたものが多かつた。是には當世の所謂豫約出版の風潮にかぶれたといふ弊もあらう。前年堂々たる朝野の先輩を後援者として貝原益軒の全集が出ようとした時に、自分は既に憚かる所なく直言した。益軒翁は江戸期の儒流の中で、最初に其文を平易にし其說を通俗にして、多數民衆の間に學問の恩澤を分たうと志した人であつた。之を今更綜合して無用なる漢詩文集など〻一括し、中流以下の學力にも資力にも、不適當なる形に變化せしめることが、果して著者の志をなすの途であるかと痛論した。それから以後、此傾向は年を追うて增長し、讀む者は買へず、買ふ者は讀まぬといふ類の叢書ばかりが、單に商人の資本利用手段として、無益に材料を消耗して居るのである。あらゆる好

意と忍耐とを以て、僅かに實行せられんとする鄕土文獻の蒐集には、少しなりとも右樣の仕來りに、捉はれねばならぬ理由は無いのであつた。

しかし原因はそれのみではない。久しく我々の寫本家が樂しんで居たやうに、あつめるといふ以上はなんでもかでも、多々益々辦ずと搔き寄せるのが、實は免れがたい道樂人の心理であつた。支那でも叢書といふ道樂は近世は中々盛んで、不幸にして近傍に同じ蒐集を企てる者でもあれば、如何なる無理をしても先づ數量の競爭をした。しかも之を刊刻することになると、又別箇の問題が加はるのであるが、やはり一種の騎虎の勢ひの如きものがあつて、或は產を傾けてまで出さうとした者があるらしい。是などは言はゞ蒐集熱の行き止まりで、出版は其手段に過ぎぬのだが、最初から刊行を目的とした蒐集でも、やはり幾分か同じ弱點を帶びざるを得なかつた。塙氏の『群書類從』なども事實は官業であり、當時競うて好書を刊行した各藩の上に立たうとすれば、幕府の體面からでも斯うなければならなかつたか知らぬが、この蒐集には單なる學問のためといふよりも、幾分か一切經藏の建立などに近い宗教的熱情があつた。今となつては無益の努力なるのみならず、圖書館利用の乏しい日本の現狀に於ては、往々にして知識の普及に有害なりしことは、大火以前に東京人のみの特權として、町の古本屋から一種二種の類似の零冊を選り買ひし得た、幸福感を考へて見てもわかることである。何の爲に寫本は版にして置くべきであるか。それさへ靜かに考へて見ることが出來たら、いやしくも叢書といふ以上は、あらゆるものをかき集めねばならぬ樣に、早合點することの誤りは分つた筈である。但し『南部叢書』にそんな懸念の無いことは、自分はもう知つて居る。僅か十七八歲で亡くなられた殿樣の歌の集、代毎に型の定まつて居た表向きの沙汰手續き、特旨叙位式に事實と反した屆書までも採錄して、藩史家史の任務を兼ねなければならなかつた鄰縣の大叢書を見てから、今更之を模倣して見ようといふ考へは大抵起るまいと思ふかちである。

七

理窟はあまり言はぬつもりであつた。今少しく話しを叙述的にして見よう。地方によつて文獻の富は、非常に著しく違ふやうである。江戸は別として大體は中央に遠ざかるほどづゝ、寫本の殘つて居る量が多くなるやうだが、なほ色々の原因が加はつて、其中にも厚薄を生じて居る。例へば同じ大藩でも、薩摩と土佐とは非常な違ひで、前者に在つては所謂士風が筆の多辯をさへも是認しなかつたらしく、頗る現今の土佐人鹿兒島人の社交態度の差異が、由來する所遠きを感ぜしめる。土佐では宮地堅磐といふ近年の學者が、たしか五十前で死んだのに、十數種の著述以外に、非常に綿密な大部の見聞錄を自寫してゐるのを見たことがある。畫なども澤山入れて一々彩色がしてあり、到底複製の見込みのない珍書であつた。是などはほんの一例で、土佐にはむかしからこの種の筆豆がうんと居たらしい。吉村春峯といふ明治初年の學者は土佐人で、內閣文庫の爲に『土佐國群書類從』一千餘卷を、人を督して筆寫校訂して居る。土佐一國の學者の二百年來の編著は遙かに是以上あるので、現に自分の名を聽いたものでも、まだ此外に幾らもあり、殊に塙氏の方針に從ひあまり卷數の多いものは、類從からわざと除いてある。しかもそれが土佐の近代の生活と、交渉あるものを主として居るのである。教育が早く藩士の間に普遍したこと、有數なる學者が出て指導した事も原因だが、一つには生活に餘裕があり、鄕士の公務が簡であつて、武藝一方ではかれ等の活力を使ひ盡すことが出來なかつた故である。

東北の方では、出羽の莊內三郡が中々寫本の多い地方であつた。十餘年前まで存命であつた羽柴雄輔翁は、ちようど土佐の吉村氏に匹敵すべき精力家で、自身騰寫した故鄕の著述類で、その東京の住居は身うごきも出來ぬ位であつた。大部分は今慶應大學の圖書館に在るかと思ふ。土佐ではあまり多いために却つて出版の計畫などが立ち兼るやうだが、莊內の方では古く『大泉叢書』近年は又『莊內史料』といふ名でも刊行が企てられた。殘念なが

ら中々其内の眼ぼしいのだけでも出てはしまはなかつたやうである。是も一箇の壺中天地で、土との親しみが深い爲に、此の如く昔なつかしい好書が多かつたのである。鶴ケ岡の安部某老人の見聞記などは、明治に入つてから迄書き續けられて居たやうである。

南部領などは、廣さは土佐に超え、著述の數量は莊内よりも稍少ないかと思ふ。さう言ふと直ぐ競爭心が燃えて、無理にも目錄をふやしたいのは人情だが、少ない方が寧ろ通例で、最上でも秋田でも、現在知られた限りでは、よいにもわるいにもさう澤山の本は出來なかつたらしい。但し速斷は固より危險である。特に尋ねて見たので無しに、以前から世人が名を知つて居るといふのは、何かよく〳〵因緣のあつたものばかりである。謙遜なる著者もしくは只堅くるしい子孫であつて、自慢らしく人に吹聽せず、年を經るまゝに愈ゝ十襲珍藏して、寂然として今に至つたものは多からうと思ふ。現に最近には『青森縣史』の編者中道等君は、根氣强く津輕と奥南部とを巡歷して、少なくとも三千件以上の文書記錄を觸目したと稱して居る。勿論其大部は本では無かつたらうが、それにしても今日其儘世に傳へて可なる年代記日記類隨筆見聞錄の類の、永く其名を記憶すべきものも少々では無かつた。自分の經驗では鄕土資料の展覽會などを開くと、意外な寫本が屢ゝ出現する。東京近くでは相州の田舍、京都府下では丹後などの、通例さまで望を抱かれぬ地方に、やはり人知れず書物を遺さうとして居た誠實な學界の使徒があつたことを發見して、愉快の情を抑へ得なかつたこともある。縣の圖書館などを訪問して見ても、自分はまだ一度でも失望して還つたことはなかつた。

八

只今自分の机の上に、『出石騷動記』といふ一書が到着して居る。此本の著者たる八十六歲の櫻井勉翁は、感謝すべき地方文獻の功勞者であつた。四十餘年以前、此人が内務の地誌局長であつた時に、始めて全日本に亘つて風土記の編述が企てられた。和銅延長の遠い昔

の蹟を繼ぎ、更に明清の『一統志』と肩をならべんとする抱負であつた。現に各縣廳には其際の指令に基づいて、作り上げた大部の稿本が傳はつて居る。其以外に中央の參考書として、藩時代の地誌紀行類の書目を上申せしめ、一冊にまとめて之を印刷したのみならず、其中の主要なものはそれ〴〵複本をとつて官庫に藏してある。それが大部分櫻井氏の仕事であつた。但しあの時代の地誌といふものは、もつぱら山川湖沼の位置名稱、其あひだに分散した邑里の境域等を明かにせんとし、住民の生活殊に内にうごく精神感情の觀察の如きは、假に他の地方との變化などを知り得るとしても、これを調査の範圍に入れるまでには、まだ當時の學問は成長してゐなかつた。それ故に材料としての寫本類なども、直接土地の表面を記載したものにかぎらんとし、平民の歴史までには手をのばしては居なかつたのである。

しかし幸ひにして地誌と併行し國史編修の企てが始まり、それが持續して今日に及んだ爲に、此方面に於て採訪せられた古書類の數は年と共に非常に集積した。現今東京大學に附屬する史料官たちは、目錄を公表することを好まぬらしいが、彼處に管理せられる數萬冊の中には、單なる證文帳簿以外に、大小の學者の計畫になつた書籍と稱してよいものも澤山にある。つまりは右の二口の蒐集寫本が、今日國民の公有に移つた地方學者の遺業である。

此うちには原本が國に歸し、又は其所在が不明になつて、地方研究の資料を却つて中央に求める場合も少なくないが、是だけで安心しては居られぬわけは、捜せばまだ〴〵出て來るらしい形勢が、次々に實驗せられたからである。京都附近のやうなよく開けた地方でも、此頃になつて東山の御文庫を始めとし、こんなものがあつたといふ實例は幾らもある。殊に史料と我々が謂つて居るのは、最初から國史、卽ち日本全體の政治生活を中心とした編年記が目的で、朝家將軍家有力の武臣等の家の盛衰と、直接何等の交渉無き常人の衣食住の如きは、又別に調べられねばならなかつたから、ごく古いもので無い限りは、假りに其方の參考書があることを知つても、手を着けられなかつたかも知れぬ。一例をいふと慶

安年中の日記、榎本氏覺書といふ自筆の寫本は、武州川越の鹽問屋の隱居の手になり、鹽の相場と關係の深い毎日の天候、其他親類知人とのわたくしの交際について、入間地方の三百年前を見るにはよい資料だが、最初之を手に入れた用途は、丸橋忠彌の若い息子が、此地の寺で腹を切らされた一條があつた爲に、偶然に今まで保存せられたのである。或は仙臺の中村氏記錄は、たしか其中に赤穗義士夜討ちに就いての短かい新消息がある爲に必要を認められて居た。卽ち何か國史として入用な記事が紛れ込んで居なかつたら、實は中央の政府では顧みなかつたかも知れぬのであつた。今後改めて自分々々の生活の經過を考察しようとする地方の學徒が、是だけに依賴して居られないのは確かで、其點から見れば叢書の事業には一通りならぬ責務がある。單に古いから人が知らぬから、此地方の人の仕事だから、皆殘して置くといふやうな輕い心持からそんな試みをなされたら、必ず今にやりなほしの必要が起るだらう。

九

そこで少しばかり、歷史の學問と書物との關係を、考へて見る必要が起つて來る。歷史は現在の日本では、小學校の中まで入込んだ、所謂普通教育の主要科目であるが、果して今迄のやうに本で調べてわかつたことだけを教へて、是が歷史だと云つて人が滿足してゐる時代が、いつ迄續くかは大疑問である。他の學科は力めて兒童の心中に好奇心を起させ、知識慾を刺戟して其要求に應ずるを以て、有効の手段としてゐるに反し、獨りこの一隅のみは、詰込み以上に能事なく、眞率なる少年が先生に向つて發する質疑は、大抵は答へ難いことばかりであるのを、如何とも致し方のないものとあきらめて、良心ある人々までが、脇を向いては彼等の尋ねない事のみを教へてゐる。歷史を以て我が知識と考へず、一生往くことも無いらしい外國の地理などゝ、同じ列に置いて眺めようとする者があつても、之

を戒告する資格は無いわけである。

だから其少年が愈ゝ成長して、實際生活の苦艱と直面する場合にも、自然に湧起する疑問の解決法として、先づ求むべき手段を求めようとはしないのである。目の覺めた多數國民にとつて、幾ら働いても困窮は免れず、どんなに儉約をしても金が殘らぬといふことは非常な大事件に相違無い。そんなら親の代、祖父の頃にはどうであつたか。又彼等はどうして居たか。以前はさも無くして此頃更に苦しくなつたとすれば、其間にはなんの差異があるのか。不幸の新たな原因に人間の誤謬失錯があるとすれば、それが社會のものであれ、はた各人の心得ちがひであれ、之を探究するのが史學で無くてなんであらう。然るに月の世界の事まで問へば教へる人が、此點だけは默して言はぬのである。人が歴史を實用の學問とは認めぬやうになつても仕方はあるまい。其結果は與へられた政治の力を以て、兎に角世を改良して見ようとおもひ、又知識より他には我々を指導する者の無いことを、たゞ漠然と理解して居る者が、西洋人の書いた貧乏原因論、乃至は獨斷の多い或一派の宣傳文書を讀んで、假に自分の實際には當てはまらぬ點が多くとも、單に感情の上からも之にうどかされ、又導かれることになるのである。

歴史を今少しく同情のある學問とせねばならぬ。さうして各人の生活の周邊から、自分で開いて行かれる知識としなければ、教へて却つて粗末にせられる虞れがある。それには方法はまさしくあつたのだが、今までは顧みられなかつた。寧ろ餘りに在來の歴史を重んじ過ぎた結果である。在來の歴史は人もよく知る如く、朝廷の歴史であり中央の政治史であり、貴族武將社寺の歴史であつた。と言ふのが文字を利用して書き又は讀み得る者が、此方面にしか居なかつたに拘らず、記錄文書書籍だけによつて古い事を尋ねるのが卽ち史學だと考へる風を改めず、故にたま〳〵時代が進んで、右に列擧した以外の問題を討究することになつても、一旦安心した昔の方法の外には出られず、どうせわからぬからと大ざつぱにあきらめて居たのである。それでは承知をせぬ者が、段々增加して來るのは當り前の話だ。

十

鳥居龍藏君などの一派の學者は、好んで有史以前といふ語を用ゐてゐるが、もし有史といふことが書いたものゝのこつてゐるといふことを意味するならば、岩手縣などの多くの農村は、現在なほ有史以前である。土鉢土瓶の紋樣の比較だけで、彼等の生活を知り得ざるは明白なことである。もし又全國のいづれかの部分に、最古の記錄の現はれた時代、又は其中にすこしでも年數の算へてある時代からが有史以後ならば、それは耳をとつてはなをかむと云ふものである。そんな風だから幾ら古い事の好きな人が多くなつても、地方の人には歷史は夢のやうだといふ感じを無くすることが出來ぬのである。

是は寧ろ有史以外と名づくべきものである。如何なる小民でも先祖の無いものは無い。先祖も人ならば人だけの生活、といふよりも最も我々と近い生活を續けて居たに相違ない。

彼等の方が今よりも幸福であつたか、はた又我慢がよかつたか、もしくはやはり憂愁の中から、非常の忍苦を以てすこしづゝの改良を企てたのか。それを確かめた上でないと今後の計畫も立たぬのだが、或明瞭なる理由があつて、久しい間彼等の記錄は絕無であつた。即ち今日に及んでまごつかねばならぬやうに、最初から出來て居たのである。

殊に東北には二十年近くも前から、東北振興會などゝいふものさへ出來てゐて、是非とも研究せらるべき特殊の困窮原因が、存在することのみは認められて居た。しかし大小の名士之に參與し、隨分の公費も之に向つて支出されたが、なんといふ事もなくて今ちようどつぶれようとしてゐる。そんな騷ぎをせずとも、なんぼ東北でも或名士は既に金持ちだ。或實業家は既に着々として成功して居る。問題は凶年でも無いのに栃の實などを食つて居る人、少しく作柄が惡いとすぐに營養不良になる子供、病人でも續くと忽ち竈を覆へすやうな百姓が、何故に東北にばかり殊に多かつたかといふ點に在つたのである。なるほどこれは六つかしい問題で、寒氣の爲といへば北海道はどうだと言はれる。さうで無くとも士

地をあけて立ち退くわけにも行かない。教育の不振といつても學校はちやんとあり、教案は世間なみに出來て居る。やはりそれよりも實地の生活を自ら觀察し考慮する者の爲に、大切な指導者たるべき歴史の科目が空である故に、結局事情の大いに違つた中央部日本の尻ばかり、追つて居たのでは無いかといふことになる。

世間ではよく東北六縣などゝいふけれども、わたしの見た所では、これを一括して考へ得る東北人は一人も無い。福島でも仙臺でもはた盛岡でも、人の顔は常に東京方面をのみ向いて居る。奥地を別扱ひにして自分たちばかり中央化しようとする風は、野邊地田名部あたりにも及んで居る。しかも濃淡の差は少しあつても、奥羽の開發せられた事情はほゞ一であつた。それが中央に見られぬ特色を痕づけるものとすれば、其研究の利害興味は弘い區域に共通であるわけだが、悲しむべし割據分立、物知らぬ外部の人に賴まなければ、東北振興會は出來なかつたのである。新らしい學問の聯合の、特に此地方に起らねばならぬ事情は、今や眼前に迫つて居る。萬一其急務に向つて貢獻することも出來ないやうだつたら、『南部叢書』も亦一箇の「東北振興會」に過ぎぬだらう。

十一

新らしい學問とは、勿論有りもせぬ書物を鉦太鼓で探すことなどは意味しないが、確かな資料だけを手に入り易い形にして遠近の同志に頒ち、一日も早く現在の史學攻究法の弱點、即ち地方生活の調査には、文字記錄よりする知識の供給に限度のあることを覺悟せしむることは大必要である。是は必ずしも東北六縣だけに限るといふので無いが、斯ういふ種類の材料の一端に偏して居ることは驚くに絶えたるものがある。證文軍忠狀といふ類は大切に保存せられて、南北朝からのが殘つて居るは結構と思ふが、其數は知れたものである。記錄といふ類になると、早ずつと後の時代の、しかも覺束ないものばかり多い。學者が名を署し責任を負うて、我が信ずる知識を後代に遺さうとしたのは、二百年來と言ひた

いがそれよりなほ後のことである。其うちの最も誠實な人が、土地の昔を說く爲に現場を踏み、又は親しく物知りの言を聽き取つたので、其記錄は勿論貴といが、必ずしも全區域に亙らぬものが多く、幸ひにして十分に周到であつた場合にも、是から我々の實行せんとする同種の調査と、古今の差を比較し得る時の隔たりは、二世紀にも足りない短かいものである。

尤もこの最近の百年ばかりは、非常な大變化の百年であり、舊い物の片端から破碎した百年であつて、しかも老人の中にすら、最早其變化のあつたといふ事實をさへ、折々は忘れんとする者がある。從つて確實なる當年の見聞錄が殘つてゐるといふことは、どの位我我の推理の勞を省き、又新たなる研究の結果を確かめさせるか知れぬのである。是がせめて今三四百年も前から此通りであつたら、未定不可解といふ問題がずつと減少し、單なる成績の興味からでも、地方の史學はもつと繁昌したのだが、遺憾ながらさういふわけには行かなかつた。其上に秘藏の古文書などの一覽を望み難かつたことは、むかしは今よりもなほ更であつた故に、滅多にさういふ二種以上の史料の、互ひに相容れざるものを比較して、當否取捨を決し得た者がなかつたのである。卽ち各人は自己の利害と關係の無い場合にも、互ひに異なることを知り且つ信じて、それが突き合されると必ず爭つてゐた。書物さへ讀んで居れば學問が進むと信ずることの、時として迷信に近いのは此爲である。舊家の持ち傳へた寫本などはどの樣に多くとも、第一に無益な手習の如きものが澤山にまじつて居る。第二には時代と方面とが甚だしく偏してゐる。第三には或記錄は最初からせまい目的があつて、注意しなければ人を誤りに導かうとする。さういふ中で公平且つ理解ある選定をなし遂げ、地方研究の肝要なる用途の爲に、少しなりとも是を役立たせようとすることは一事業である。しかも叢書の計畫の爲などに、辛苦して諸方面を涉獵する人々にして、始めて到達し得るやうな實驗も少なからず、貴重なる文獻學の知識は、通例其副產物として地方に殘るのである。

十二

古くからの文書集や記錄類の淸書をして、其儘書籍と化せしめることの出來ぬのは、それ等に餘り狹隘なる目的があるからである。舞や謠や歌物語り其他若干の讀み本類が、人を樂しましめるといふ目的の爲に、屢〻虛僞作爲をも避けなかつたことは、人が知つて居るから用心をする。之と比べるのはや〻氣の毒かも知らぬが、他の少なくとも自分は眞なりと信じた舊記と雖、特にさうして殘して來た動機を考へて見ると、その本來の目的通りに無造作に之を利用する危險は同樣である。早い話が家々の感狀とか催促狀の類でも、單純に名譽の記念といふにとゞまらず、大抵は所領安堵の根據として用立つて居た。訴訟の目安沙汰文の如きは、いつでも勝訴の家に保存せられ、相手のために不利の記事をふくまぬものはない。系圖は卽ち權利繼承の過程を立證したもので、如何に烈しきお家騷動のあつた場合でも、現在の當主が持つ系圖は平穩無事である。津輕の人たちが津輕に在る系圖を證據とする限りは、いつの世が來ても史論の決着することはない。或は又旣に論爭が始まつて、中々相手が承伏せぬために、發奮して書いたといふ類の家記もある。さうでなくとも先祖の名を顯はし、子孫を激勵する趣意の書には、少なくともよい事だけが拾つて書いてあり、其都合によつては敵方をわるく卑怯に書き、もしくはさう誤解して居らぬとも謂はれぬ。要するに之を反面的に客觀の叙述と受け取つては間違ふのである。しかもさういふ實記が双方三方に存在する場合はよいが、他は埋沒して一つだけのこり止まり、思はぬ好い兒になることも無いとは言はれぬ。それへ加へて時代が稍遠ざかると、豪傑勇士を愛する人情から、賴まれもせぬのに無用の誇張をしたり、或は話のあまりに手短かなのを不本意として、有つてもよいと思ふ挿話を發明する。虛言といへば惡意に聞こえるが。是もむかしを愛する年寄などの趣味から、話が成長する如く書いたものも成長して、年代がたつほど詳しくなつて來たといふ、源平盛衰記の如き滑稽も現はれる。うつかりと古いめ

づらしいといふだけでは、學問上の價値を推定してしまふことが出來ないのである。

井澤長秀の『廣益俗說辯』などを讀んでみると、あの時代は實學が既に起り、一方には益軒とか白石とかいふ類の學者が出てゐたにもかゝわらず、俗間にはまだ文字の絕對價値の如きものを認め、書いたものならば何でも信じようとして、歷史と小說との差を明確にせぬ人が多かつたらしい。假へば『前太平記』とか『北條九代記』といふ類の所謂演義體の物語、或は謠曲や舞の本の如き冊子を指摘して、此點は信ずべからずなどゝ堂々と論破を試みてゐるのは、今日の眼から見ると不思議なやうである。つまりは狹隘なる一定の目的を抱いて筆を執つた人の、非常に働き易く成功し易い時代が、近い頃までも及んでゐたのである。

それには輕信した者の方に責がある場合も多いが、一方にはさも眞實らしく虛僞を述べた例も少なくない。最も極端なものは水戸の鵜飼信興といふ名前で出版した『日本珍書考』其他の二三種で、有りもしない和漢の書名を、卷數頁數まで麗々と記載して、如何にも大藩の秘庫などを涉獵した如く見せかけ、口から出まかせの虛誕を列記し、今日見ても腹の立つ本である。地方研究の方面では、靜岡で出來たと言はれる『總國風土記』の斷簡と稱する者などは、久しい間騙されて之を引用する學者があつた。潮音の『舊事大成經』や、近江の某の『江源武鑑』の類は、幸ひにして早く看破せられたが、實にけしからぬ心得方の本である。地方によつては未だ顯著ならずして人のまだ警戒せざる僞書、もしくは之を信じて引用し編纂した書物が、決して絕無とは安心しがたいのである。

十三

叢書の編輯者が書史の全般に通曉し、記事の內容に關してまで保障の責任を負ふといふことは、勿論不可能でもあり又今日は不必要でもある。たゞ此際の任務としては、所謂汗牛充棟の現狀に於ても、なほ實際の生活研究のためには、文書の資料が甚だしく有限であ

ることゝ、記錄當初の狹隘なる目的のみに追隨して居たのでは、永く故鄕の學問を快活又有用のものにする見込が無いことを、明白にしてもらひたいと思ふ。それには小原敏丸君のやうな物の見方をする人が、一方に有るのも却つて便利かも知れぬ。

著述家寫本家が家本位の古い型に囚はれず、自在に知識のための知識を集めて見ようとしたことは、註釋考證の學問が稍進んでから後の事で、殊に地方に於ては存外に新らしい出來事であつた。他の大多數は讀者を劣級者中に豫期し、言はゞ教訓教育のつもりだから、自分の理想通り人を導かざればやまなかつた。而うして百年二百年前の注文に應じて、我我の見解を左右させては居られない世の中はもう來て居る。社會には新らしい疑問が無數に發生して、それを自ら釋かうと努力する青年が、全日本にみち溢れて居る。即ち今や學問興隆の秋なのである。辛苦と好意の結晶とも認むべき前代學徒の遺業は、如何に微細なものでも出來る限り、其効果を發揮せしめる必要があるのである。

だから日本史學の如き保守的の學科に於てすらも、もう相應に久しい以前から、古書の利用を筆者當初の目的内に制限するやうな愚なことはしない。如何なる手前勝手な計畫になつた記錄でも、少なくとも出來た時代の空氣だけは映じてゐる。著者の意識しなかつた境遇だけは、正直に語つてゐる。例へば『古語拾遺』は齋部氏の不平家が、時世の不公平を憤るために書かれ、『日本靈異記』は物部守屋式の頑固連を、佛法信仰に引き入れるために集成せられたとしても、大和朝の末期の社會相を詳かにするには、是だけの材料は他に殘つてはゐない。『神道五部書』などは伊勢人のひがごとだとしても、あれを僞作しなければならなかつた中古の神部等が地位と學力とは、これ等の書物の裏面から始めて推測し得られ、從つてそれを圍繞した我々の祖先の生活を考へるにも、之を無視することは出來ぬやうに、成心あり假託ある述作すらも、我々の態度如何によつては立派な判斷の足場になる。況んや今一段と鷹揚なる文學事業ならば、よしや其計劃の全體には共鳴しがたくとも、部分的には有用なる昔の消息が、幾らでも掬みあげられる途があるのだ。

十四

江戸では山東京傳柳亭種彦の如き、第二三流の所謂市井の戯作者が、却つて一方に於てこの新らしい學風の祖であつた。彼等が好事癖は前代の浮世草子、乃至は俳諧の連句集の如き、人のあまり心付かぬ書物から、偶然に保存せられたむかしの生活のあとを見出さうとした。殊に推服に値するのは、『嬉遊笑覽』や『畫證錄』等の著者喜多村節信と其一群であつた。今まで官府の學者が鄙俗として顧みなかつた平民の社會、普通選擧の第二十世紀に入つて、始めて我々が無視する能はずと考へ出した多數公衆の、最も通例なる日常の衣食住に注意し、それが時勢と外間との感化によつて、寸刻もやすまずに變遷しつゝあつたことを、兎に角に明白なる文字の證據に由つて、我々に告げ教へたのは此人たちが最初であつた。其爲には報いられざる辛苦があり、又忍耐すべき世間の輕蔑があつたが、今となつては是は皆貴ぶべき物ずきであつた。尤も彼等の研究が江戸に偏し、且つ又往々にして狹斜の巷のみに深入りした非難はある。しかも堂々たる史學者が眞僞區々たる舊記類の羅列と輕信とを以て、是れ修史なりと考へつゝ、窃かに其矛盾になやんで居たのが、漸く史料批判の一隻眼を養ひ、兼て若干の旁證を古文獻の偶然の記述に索めようとしたのは、彼等よりも遙かに後れた、つひ近頃からの改良であつたのだ。

前にも言ふ如く歴史が中央の大事記であり、政治と戰爭との交錯に止まるものなら、それだけの改良でも滿足してよいか知らぬが、實はこの學問に向つて世間の今日要求して居るのは、そんな狹い範圍では無いので、むしろ喜多村氏が注意したやうな、通例人の通例の生活の、如何にして今日に至つたかである。文字を支配した階級の度外視した、微々乎在の三千年である。それには記錄が特段に乏少であつた。別に資料をたづね方法を講じなければならぬことは當然である。考古學と稱するもの〻出て行かうとした方面もそこに在つた。しかも遺物遺跡といふ語が、竪穴貝塚土器石器、些々たる骨片に限られて居る

間は、假に太古時代は白晝の如く明るくなるとも、我々の祖父曾祖父の世界はなほ薄暮である。遺跡をもとめるなら日本といふ島々、就中めい〳〵のすんで居る村と屋敷、これほど確かなる日本人の遺跡はなく、遺物が欲しいとならば我々の生活の周圍に在る事物の大半は皆それである。單にそれのみか現に御互ひのもつ身體でも外貌でも、一つとして古い由緒の具はらず、出處の不明なものは無い上に、彼等の交換する語音と事物の名、之によつて運搬する感情と思想とには、突發的のものなどは一つも無く、歌ひ語る所は文藝であり、默して贊否取捨する所の判斷は、悉く世襲の道義律と信仰にもとづいてゐる。其上に人には意識し又は意識せざる記憶があり、之を尊敬する共同の氣風の、名づけて慣例と謂ひ、世間並と稱するものがあるのである。此等の鄕土の諸材料の、未だかつて記載し比較せられざるものを、消滅と放散とに一任して、ひたすらに古書の文字に賴つて過去を知らんとする誤りが、多少の新日本人の民族自覺を、悲しむべく稀薄ならしめて居たことは、今更繰り返したくない經驗である。

そんなら書物は全然不用かといふと、實際は正に其反對で、地方圖書の眞價値が發揮せられるのは、地方人の多くが自己の學問を心がけ始めて後の事である。二三の篤志家のみが珍書の中に籠城して、尾を見せ鰭をちら〳〵とさせて、何かそこに凡人の窺ふべからざる秘事でもあるかの如く、徒らに幸福なる博識を誇り得る間は、史學などは實は一私人の道樂だ。これを公器として萬人が自由に搜索し、一方には始終これを栞として次々に未開の野に分け入り、他の一方には直接に故人の眞率なる感動と相觸れて、われ知らず昔をなつかしみ、又鄕人を愛するの情を起すのでなければ、まだ〳〵地方の學問を盛大ならしめることは六つかしいのである。故に自分等は將來の東北のために、深く『南部叢書』計畫者の精進に期待するのである。

十五

『南部叢書』が從前の同種事業の方針と背馳して、必ずしも數量の豐富を念とせず、十分に著作の性質を吟味して、惜しげもなく既にあつまつた材料を取捨し、殊に異本を照合して、努めて第一次の寫本に就かんとする態度は當を得てゐる。此上は校訂と比較とを嚴にし、悉く類書を對立せしめて、讀者をして自然に古本の滋養分の、今は何れの邊にあるかを見出さしむべきである。是れ言ふべくして行はれ難い事のやうなれども、既に新史學の本旨を理解し、書物は單に學問の案内者、乃至は山口の栞に過ぎざることを認むる人々とならば、相顧みてうなづき合ふことが出來ると思ふ。

そこで自分の長話も終はらうとするのであるが、なほ一二點だけは序を以て申したいことがある。自分の目的は初めにも述べた如く、第一には此地方の諸君と共に、今後の地方研究と書物との關係を考へて見ようとした。第二の目的は目下計畫中の『南部叢書』が、如何なる用意を以て實現せられてよいかを說きたかつたので、その二つはほゞ趣旨を盡した。殘るは第三の點の小原敏丸君の所見を批評することで、不必要かも知れぬが、自分の名も引用せられた緣故により、立ち場の相違を明白にして置くのである。全體和賀郡黑岩の小田島氏といふ舊家に、地方前代に關する多量の寫本が藏せられて居ることは、他の人から聽き知つたのでも無いのである。今から六年餘り以前に私の家へ、小原敏丸君が來訪せられて、物の序にしみじみと其話をしたのである。書物の名もよくは記憶せず、況んや如何なる性質のものかも知る筈は無いのだが、どうも連綿たる名門であり、又先代に好學の士もあつたらしいから、恐らく其中には此家だけに傳はつた注意すべき記錄もあるだらうと考へ、永く世に埋もれさせることの不本意さを語り、小原君も同感だつたやうに思つた。しかし其頃はまだ『南部叢書』などを計劃する人も無かつたので、折々故伊能翁や佐々木喜善君と逢ふと此事を談じ、何とか利用の途は開けぬものかと歎息をしたことであつた。永い年月の間には、自分は何度ともなく同じ經驗をして居る。例へば『遠野物語』が出たよりもなほ一二年前に、水野葉舟君が東北旅行から還つて來て、花卷の某氏が非常に多量の寫本を所藏して居り、其内の二三は水野君も讀んだと語つたが、主人があまり評判にな

るのを厭うて居るといふので、今にわかると思つて其氏名を聽いて置かなかつた。此事も幾度か友人に話をして、現に最近には太田夢庵君の如きは、種々の手數をかけて物色したやうだが、果して今も默つて所藏するのか、又は既に主を換へたか、それだけの事すら突き留めることが出來なかつた。現在に於ては公表の能不能よりも、自分は其書の保存の爲に憂へてゐる。

書物はよほど亡失し易いものであるらしい。又因緣の如きものがあつて、今迄はさう容易に讀むことが望まれなかつた。明治二十何年かに仙臺の學者たちが、鄕土文學の展覽會を催した目錄が版になつてゐる。それには一々所有主の氏名がかゝげてあるが、二十餘年をへだてゝ再び之を歷訪して見ると、依然として故の家に持傳へたものは十の三にも達しなかつたと、『仙臺叢書』の發起者の一人常盤君が私に話した。私の實家松岡氏なども、本家の土藏に長持入りの古文書があつた。篤學なる父は久しい間一度見せよと本家の主人に賴んだが、老人はわしは養子だからといふ理由で頑として見せなかつた。其うちに父は東京に移つて歿し、本家の主人は勿論、今に見せてやると約した其子も老いて死に、村にかへつて見れば若い孫は醫者になり、改築してもう土藏其ものが無くなつてゐる。單なる保存といふことさへ今日は必ずしも容易でない。況んや之を學問の利用に供するなどは、望みがたいのがむしろ普通であらう。

十六

ところが最近になつて、その小原君が再び自分の家を來訪せられ、六年以前と同一の熱心を以て、再び親族小田島家の藏書の事を詳說した。私は此君が記者であり、又新人であることを知る故に、話の動機が自分と同じく、篤厚なる故人の遺業が、寸分も世を益する所なくして、空しく寡婦孤兒の手に守られてゐることを憂ひ歎く以外には、何か在るといふことを想像し得なかつた。しかもその六箇年餘の歲月は永いけれども、人生は必ずしも

如意で無い。うつくしい志は有つて力の施すべきもの無き場合は、自分なども何度となく經驗して居る。寧ろ何等の悔恨すべき出來事も起らずして、其六年が平和に過ぎ去つたことを慶するのほかはなかつたのである。

此の如き奇緣に直面して、もし自分が『南部叢書』の計畫あることを語らず、又此機會に際して一部分なりともこれ等の古書を世に公にすべく、努力せんことを勸誘しなかつたならば、自分は地方人の學問に同情なく、前代生活誌の闡明に熱心ならず、從つて北方文明研究のために音頭を取るの資格なきものと評せられても一言は無いわけだ。それ故に關係者以上の熱情を以て、叢書の眞趣旨を說いたつもりである。ところが小原君はもう既に『南部叢書』の事を知つて居て、わたしの說明は不必要なやうであつた。其折にも二度まで岩手毎日が掲載した通りの、亂暴な古文書取扱ひの苦情をくはしく聽いたが、それは貸借承諾の條件を說くものとは受けとれず、むしろ小田島氏藏書出納の全權が、一に同君の手に在るといふことだけが、自分の新たに得た印象であつた。

しかし其當時自分の窃かに憂へたことは、各地の舊家に於て往々其例を見る如く、小田島氏の圖書は書籍といふよりも、一門の自尊心が籠つた家寶の如きものであるから、之を叢書として自由に取捨し、此書はあたらしいが學問上有益だ、これは珍らしいが急いで出すにも及ばぬなどゝ、客觀的に價値を決定することが六つかしさうだといふ點であつた。少なくとも彼家の昔に關する若干種だけは、今少しく世間の學問の進むまで、待つのがよからうとも考へて居た。それよりも家では比較的重さを置かぬ吾妻昔物語などの閒書類、もしくは軍記類のよい異本をさがし出して、校訂し得たならば幸ひだらうと考へて居た。書名も碌々に知らずに、必ず珍藏の家傳を『南部叢書』中に入れよと勸說したかの如く傳へられては、拙者平生の持論と一致せぬことになるから、先づ之を訂正したい。

率直なるわたしの希望は、自由にかの家の文庫をさがして、學問本位の價値批判をなし、二三有益のものを利用したいのであつたが、それは往々にして舊家の自尊心を傷けるものだといふことを經驗して居るから、先づ斷念のほかはあるまいと感じてゐた。故に小原氏

が自費刊行を聲明して、協同を拒絶せられるのも意外で無い。たゞ進んで若干未檢の書が、悉く世用疑ひ無きものであるかの如く、又之を缺くときは則ち『南部叢書』は完全ならざるが如く、人を信ぜしめんとするのは正しくない。叢書は最初から有る限りの古書を網羅せんとは言はず、寧ろ先づ有益有意義のものから刊行を企てゝ居るのでは無いか。もしよくよく世を益し學問に意義ありとの確信があるなら、そんなら何故に早い機會を捉へて、地方に流布せぬかといふことになるだらう。何となればそのやがてといふ自費出版の如きは、實は單なる保存行爲に過ぎぬからである。

十七

書物を愛惜する持主の情には、微妙複雜なる色々の分子がある。近來は非常に減じたけれども、無くなるのよどすのと表向きはいひながら、寫しを取られて天下二品となることを、厭ふ者さへあるのである。天平の古經を二つ三つにきつて、兄弟でわけたりしたのは此連中で、つまり書物として見ることが出來ない人である。自分の近隣に住む人に、此癖の既に病となつた者が一人居る。何の科目であれ自分は讀み得ない本でも、苟くも日本に一部しかないと決すると、高金を拂つて買込んでしまつて置き、一番多くの涎を垂らしさうな其方面の專門家にちよいと見せる。さうして借覽又は熟讀を求めると、或は綴ぢ直しにやつてあり、或は他の本の下積みになつて一寸見えないことにきまつて居た。但し幸ひにして多くは戯作者の自筆稿本などであつたから、私は少しも困らなかつたが、此頃は我々の方面の入用品も、斯うして追々に侵略されるので弱つて居る。又今一段とたちの惡いのは、自分が久しく地方誌や地方學者の隨筆を貪り讀んで居ることを熟知して、顏さへ見ると斯ういふ本を見たが面白かつたといふ話をする。それに動かされて貸せといふと、快く承諾はするが一度でも見せたことが無く、尋ねて見るとあつたことだけは事實でも、とくのむかしに古本屋に賣つてしまつて居る。是などは愛書病以上の偏つた優越慾だが、

それもこれも所有權の現法制の下に於てはあきらめねばならぬ事で、例へば眼前へ持つて來て引き破つて燒かれても、之を爭ふ手段は無いやうな時代だ。しかし小原敏丸君が二度までも私の家へ來て、同じ寫本の話をした動機に至つては、何としても此から類推することの出來ぬ初經驗であつた。何となれば同君は、自身が此書物の所有者でも何でも無く、單に古書が世の中の役に立つことを、邪魔し得るといふだけの力しか持たぬからである。

人の大切な古書籍を借りて置きながら、それを不注意に汚したり破つたりすることの、惡德なることを認めぬ者は一人もあるまい。況んや證據がなく又は相手の遠慮深きを利用して、其まゝ横領しようといふやつは人ではない。一鄕一縣の中堅に在る者が、其地位を挾んで押し借强奪をしたとすれば、自分たちはむしろ皷を鳴らして其罪を問はず、因循として憤りを忍ぶ者をさへ輕蔑したいと思ふのである。しかし其罪惡と、書物を學問の用に供することゝは二つの問題である。自分は果してそれが何の關係があるかと問うて見たい。

日本に唯一つの國立圖書館、しかも帝都の大公園と併存する圖書館の中にも、驅除し難い惡者が折々潛入し、珍書を借りて藏書印を切とつたり、又アート版の一枚を破つて持ち歸つたりする。それは國人共同の耻でもあり、同時に學問其ものゝ不名譽でもあるが、之を防ぐの方策が他に無いからとて、貸出し中止の窮手段は誰も講じようとはせぬ。勿論圖書館は貸すが役目、個人の家には貸さねばならぬ義務は無いが、張三が酒を飲み李四が錢を拂ふべしとする筋ちがひは一つである。それとも天下の古書を愛重する人々は、必ず無智の小吏等と行動を一にし、借りた以上は破るべし汚すべしと斷定する理由でもあるのか。穩かならぬ類推法ではある。

十八

長くなつたが今少しく、自分の記憶する逸話を試みよう。明治四十三年、始めて內閣文庫の管理を命ぜられた時に、自分は前任者の江木翼君から、實に厄介千萬なる事件を一つ

引繼いだ。それはちようど東京經濟雜誌社で、塙氏の『續群書類從』の豫約刊行をして居る際であつたが、其原本を內閣文庫から借りて、それを其儘活版の原稿にしたばかりか、實に惡筆で異本を校合し、中には鉛筆で符號などを附けて、墨だらけにして綴糸をほごしたまゝ返して來たので、さア江木先生が承知せず、斷乎としてもう貸さぬと言ひ切り、社からは社員が日參をしてゐる最中であつた。將來は勿論改めると云ふので、何とかして話をつけてやらうと思つてゐると、事件の發頭人たる黑板勝美君がやつて來た。其態度が又如何にも無邪氣なもので、是はネ君、非常にわるい本で、時々二三行もぶつとばして寫してあるのですよ。今度のうちの活版本が出さへすれば、忽ち反故にしてよい本なんですよ。宮內省とかにはもつと善い寫しもあつて、ちつとも惜しいことは無い書物だと力說する。しかし江木君のをこつてゐるのは又別の理由からであつて、之を聽かせたらもつと怒ることゝは思つたが、私は腹の底では是にも一理があると考へた。靑砥藤綱などとは正反對だが、天下の公用から見れば、損よりも益の方が大きいのである。しかも黑板君の計劃は經濟變化の爲に中途に停止し、過去の損害だけは永く殘つたのだから、借りた方でそんな太平樂を言ふのはよくないが、書物などは書畫とは目的がちがひ、世人に讀ませる爲には、時としては兎が身の毛をむしつて巢を作るやうに、次の代の爲殊に學問のためには、損失を厭ふに及ばぬ場合さへある。要は効用の如何を以て決してよいと思ふ。

自分は今金田一京助君など〻協力して、實は『蝦夷叢書』の刊行に奔走してゐるが、最近に北海道の方面で一つの興味ある經驗をした。日高と根室と二ケ所の有名な佛寺に、何れも一本しか無い日記の古いのが遺つてゐる。其寫しを取らうとして北海道大學の一敎授が交涉せられたが、一方の寺では前年德富蘇峰氏が來て一見し、こんな珍らしいものは少ないと言はれたのを、誤解か正解か高く賣れると解釋し、賣れるならば寫しがない方がよいといふ考へで、複製は御免と謝絕をする。他の一方の寺では返答が丸で別であつた。住僧など〻いふ者は折々交代する。それほど大切なものなら、其都度亡失を患へるのも難儀だ。單にこの寺に傳へてあつたと、書き添へて置いてくだされば、それでよろしい。原本を持つ

て行つて、費用があるなら寫しを一部、寺の方には置くことにしてくれと謂つたので、同じ僧侶にも色々な考へ方があるものと、今も專ら其噂をしてゐる。

十九

我々は決して禪僧の如き思ひ切りを、執着多き凡人に要求する者では無いが、せめては世間尋常の情理を以て、書物の利用の如き大切な問題には、臨んで貰ひたいと云ふのである。獨り一個の小原氏のみならず、もし同じやうな感情に由つて、或は叢書事業の不成功を希求する人があるなら、反省して貰ひたいと思つてゐる。故人が心血をそゝいであらはし又は寫し取つたものを、假に無智にもせよ粗末に取あつかつて、其子孫に不快の念を起させる如き不道德は、今後如何なる方法を用ゐても制裁し、撲滅せねばならぬのは當然だが、其理由のみで惜しみ又は隱し、世にあれども無いと同然の狀態に置くことは、第一に先祖の素志を空しくするものである。石室に書を藏すといふ支那の故事は、小原氏も一寸引用したが、あれは佛法でいふなら末世の兵亂を免れる手段、儒敎の方では是非を百年の後昆に問ふなどゝ謂つて、目前の世の中では話にならぬ故に、そつと保存をして置いて時期を待たうといふ趣旨である。而うして日本の聖代に於ては、その時期が今正に到來してをるのである。斯んな時期をむなしく保存して置いて、さて何れの日を待つといふのであらうか。際限も無くたゞ保存してゐるうちに、地方の青年が最早前代に興味を抱かず、見たこともない外國の飜譯書のみによつて、人生の問題を解決する風がさかんになつたら、再び單なる亡失を防ぐために、又靈山石室を求めて辛苦することになるではないか。それを書き殘した人が希望するとおもふのは誤りである。

他の一方對社會の關係から言つても、やはり先人の德を累はすことは一つである。具體的に引例をするならば、もし小田島氏の主人が古文書をよごされたことを憤つて、他日今一度黑岩村の漁業權、所謂横止堰の利益が奪はれんとする場合に、頑として證據文書を貸與

しなかつたとしたならどうか。北上川の流れと約五百年の因縁をもち、草木土石の微に至るまで、一として祖先の友だちでないものはなかつたといふ名門が、假に以前と同じ辯護士や村吏が出て來て借用を申込んだにしても、所有權を楯に之を拒絶して、見す〳〵鄕里の損失を忍び得るものと、小原君などは考へてゐるのであるか。

効果世用の大小から言へば、好書の恩澤の及ぶ所は僅に一古碑文の村の權利を擁護するやうな比ではない。單に家寶として珍重すべく、地方の學問には大した參考にもならぬとならば又別の話だが、假にもせよ樂觀にもせよ、正しく陸中の舊事を探るが爲に、必須缺くべからずとする信仰があるなら、汚れ破れ貼紙せられる位の危險を悲しんで、之を押さへて置くべき理由は無い。況んや豫め之を防ぐ位は一擧手一投足の勞であり、しかも其不安は根據なき不安であるのだ。あまりに根據なき心配をすると、人が之を一種の口實なりと誤解する懸念もある。返す〳〵も舊家小田島氏の信望の爲に、忠實過度なる管理人を選定したことを惜しまざるを得ない。

なほ自分には關係のないことだが、此ついでに一言して置きたいのは、以前書物を人に貸して、汚した損じたといふ世間話などは、實は書物の話でさへもなく、況んや『南部叢書』の計劃とは沒交渉である。それに『南部叢書に就いて』といふ見出しを附したのは、不當なことゝを考へる。それを其儘に掲載して內容との比較をしなかつた岩手毎日子も、一分の責を分つべしと信ずる。

以上で私の言ひたいことはもう盡きた。其うちで他人の行動を批判した部分には、或は異說もあることゝ思ふ。謹しんで私は岩手日報の讀者に要求する。願はくばこの一文のみを以て速斷せられることなく、之に對する反對意見の出てしまふのを待つて、徐ろに自ら是非の判定を下されたい。それが自分などの年來東北人の爲に希望してゐる研究の自主で、又學問の獨立である。中央から遠くなるほどづゝ、地方人自身の囚はれざる思慮が、人生幸福の爲に大切になつて來るのである。

（「岩手日報」大正十五年九月）

索引

ア

アイヌ　一、二八
「奥羽觀迹聞老志」　二九四
「赤子塚の話」　九二、一一〇
「秋田叢書」　二〇五
淺草物　二二九
足助八幡宮　一二七
小豆　九二
「吾妻昔物語」　二二九
アナトールフランス　二六八
天野信景　二九〇
海部移住の跡　一二七
荒垣彦兵衛　一一六
荒垣秀雄　一一六
青木純二　七四
青砥藤綱　二二四
「青森縣史」　二〇〇

行者(アンジヤ)　一四八
安樂寺策傳　七

イ

「輪軒小錄」　二七九
有史以前　三〇八
遊蕩文學　二
筏師　一四六
イシス・アフロディテ　一九
異常心理　二〇
伊勢貞丈　二二、二九、二九二
イタコ　九九
市川海老藏　一三三
市の日　二三七
一切經藏　二九六

「出石騒動記」　三〇一
泉鏡花　一五
伊藤東涯　二七九
伊能嘉矩　一二四、一五六、二八一、三三五
岩倉市郎　一二
伊波普猷　一五〇
飯沼一雄　一七〇
家の存續　一七四
「家の光」　二三七
異本　二九〇
妹の力　一八
印刷局　四二
印刷文化　一六七
院内　一四九

ウ

鵜飼信興　二一六
「浮世の有樣」　一四八
牛方　六五
牛祭　一四九
歌比丘尼　一三五
氏子　一四三
馬方　六五
馬の舞　一五〇

エ

幼年雜誌　二二九
江木翼　二二三
「江刺郡昔話」　六六

「蝦夷叢書」　二二五
江戸文化　一九三
「榎本氏覺書」　二〇四
「燕石十種」　二九一
圓本洪水　二三五

オ

オイナユカラ　四
お家騒動　二一四
奥淨瑠璃　九九
オクナイサマ　九二
オサクタテ　二一
オシラサマ　九二
落人　一四六
御伽の者　六三

「おとら狐の話」 九〇、九七
おなり人(おなり衆) 一〇九
「大泉叢書」 二九九
大田榮太郎 一一九
太田夢庵 三二六
大塚嘉樹 二九三
「大野郡の方言調査書」 一一六
大瓢簞 一七七
おもちや 三八

カ・ガ

海道下り 一三五
「江源武鑑」 三一七
考古學 三二一
鄉士 一七三
好色本 三三九
庚申 六五
稿本 二七五、二八〇
學校の教授法 三一五
風待 六五
合羽 二〇三
桂又三郎 一二四
川舟 二〇一
貝原益軒 二九五
神代卷 五三
龜田次郎 一五三
からくり 一四九
狩谷棭齋 四一
「嘉陵紀行」 一九四
ガルガンチュア 八四

漢語教育 四三
漢字制限 四三
漢字廢止運動 三二〇
雁取爺 六九

キ・ギ

「嬉遊笑覽」 一八九、三二〇
キース(ミス・イー) 二七
舊家門閥 二七九
菊池寛 二四七
義經記 九九、一三四、一七一
岸上鎌吉 一五五
喜多村節信 三二〇
木地屋 二六、一四六
狐 二一一
狐の御作立て 二一一
狐の館 二二一
狐森 二一一
木戸忠太郎 三六
「紀年鑑鏡圖譜」 一八八
木村修三 一八四
行者 一四一
鄉土會 一八三
鄉土研究 一六八
鄉土研究者 一四四
鄉土誌 三一
共有制 五一
巨神譚 八四
漁農の生活 二〇七
京太良 一四九

京太良詞曲集　一五〇
桐大藏　一三三
記錄の古さ　七八
金田一京助　一、三三五
巾着　二〇三

ク・グ

偶然の記錄　二六三
草取歌　一〇四
櫛　二〇三
「舊事大成經」　三一七
クドキ　九八
熊谷家舊記　一四六
熊野移民　一三七
熊野權現　一七二
熊野の古傳　一三六
熊野の信仰　一七一
グラヂヤトル　一六五
クラボッコ　八七
グリム　六五
黑板勝美　三三四
懷舊談　二九三
「廣益俗說辯」　三一六
廣告　二四四
廣隆寺　一四九
火災除の守札　八七
華山法皇御遺跡　一三九
「畫證錄」　三二〇
活字本　二七六
玩具製作史　四〇

「觀潮樓偶記」　二七一
慣例　三三三
訓詁註釋　一四一
「群書類從」　二九六

ケ・ゲ

藝術發生　一四一
系圖　一八一、三一四、三一五
毛坊主　一四八
「源氏物語」　三二九
現代の社會史　二六一
「玄同放言」　三三三
「源平盛衰記」　三一五

コ・ゴ

固有の信仰　一九
紅花　一七六
公立圖書館　三三五
黃金の雞　八四
「古京遺文」　一八七
國語成長の法則　一三三
國史編修　三〇三
「國書解題」　三二一
「古語拾遺」　三二九
心得童子　八八
乞食　一九七
古書の所在目錄　二七四、二八〇
古書保存會　二七三、二七九
古代の日本語　一四五
御定府　二九二

琴 一七九
古風の殘留 一三四
護法童子 九〇
ゴマメ賣り 一七
故老 九七
ゴリ 一三六
とんにやく本 二四二

サ・ザ

材木師 一四六
「造像銘記」 一八七
裝釘 二三九、二四四
佐喜眞興英 二一、四七
佐久間洞巖 二九四
櫻井勉 三〇一
佐々木喜善 一三〇
ササラ（サヴラ） 六六、八六、三三
ザシキワラシ 八六、九〇
座談會 二六三
座頭 六三、九
佐藤清明 一二六
澤田四郎作 一一〇
佐村八郎 三三一
猿婿入の話 五九
サンカ 三一、二四
三山の爭ひ 七四、七七
「三州横山話」 九七
山中の住民 八二
山東京傳 二四七、三三〇
さんばい樣 一〇九

シ・ジ

史學 三三三
史學攻究法 三一一
時事新報 三三五
獅子舞 一三四
設樂神 一三〇
「七島問答」 一三三
寺中 一四九
「十方庵遊歷雜記」 八八
「紫波郡昔話」 五七、七〇
自費刊行 二八七
自筆本 二八〇
十二段の冊子 一三四
「鹽尻」 二九〇
島の生活 一六四
「シマの話」 五一
清水駿太郎 五〇
ジャーナリズム 二六三
正倉院 二四二
淨土宗 一四八
「莊内史料」 二九九
常民の歷史 一六〇
淨瑠璃御前 一三四
社會問題 二四
寫生の必要 二四五
寫生文學 二四七
寫本 二七五、二八四、二八五、二八九、二九八、三一三
寫木法 二三〇

植民地版 二六八
「諸國叢書」 八〇
書名標題 二四四
書目の學問 二三七
書物の道樂 二六八
所領安堵 二三四
白野夏雲 一五三
新刊書の購入 二三六
新舊文化の境目 一四三
神祇の歴史 一四一
蜃氣樓 二二一
神事舞 一四三
「神道五部書」 二三九
人別帳 二八四
身邊雜事小説 二四六

新聞の記事 二六一
人類學 一五九
神靈學會 一四
神話 一五

ス・ズ

菅江眞澄 二〇四
救ひ小屋 一七
鈴木覺馬 一六六
鈴木皷村 一七〇
鈴木氏 一三七、一七一
鈴木桃野 二六五
ステテコ(ステテイ) 一三〇
隨筆 二二一、二三七、二七八、二八九
隨筆漫錄の興味 二六〇

セ・ゼ

「井蛙抄」 二七八
製紙技術 二八四
正條植 一〇六
「西部アルプスの口碑集」 八三
西王母 一九
少年保護運動 三三〇
背皮金文字 二四〇
説話の運搬者 六二、六三
セルソール 八三
「仙臺叢書」 三六
前代文化 二、一六〇
「前太平記」 三一六
仙人 一七

千年家 一八一

ソ・ゾ

「總國風土記」 三一七
叢書刊行事業 二九一
速記術 一〇
「續群書類從」 三三四
染屋 六五

タ・ダ

たあらひ 一〇九
太子神 二九
大量生産組織 三三四
田唄 一〇八
玉蜀黍の地方名 一三

田植歌　一〇五、一〇八
高木敏雄　五三
高田十郎　七一
鷹野彌三郎　三三
高橋是清　三八
竹内栖鳳　三九
田代安定　一三四
田の神　一〇九
田の神降し　一〇九
田原藤太　八八
足袋　一〇三
旅商人　六六
旅する職人　六五
田祭の行事　一〇六
ダルマの市　三七
「譚海」　八九、一九〇、二六五、二七九

チ・ヂ

地狂言　一三一
地侍　一七三、一七四
地名の考證　三三
地方學者　二九二、二〇三
地方學問　一六三
地方刊行物　二七三
地方研究　三一三、三二四
地方語　一三三
地方色　三三八
地方の史學　三一三
地方の寫本　二九一
地方の讀書家　三三八

著述の中央集權　二六六
千代田文庫　二八一
女流大家　二五三
「中國民俗研究」　一二四、一二七
中世日本人の特徴　一九三
重箱　二〇三
成吉思汗義經說　四

ツ

追懐談　二六三
津島の師職　一四六
坪井九馬三　一一九
坪井正五郎　一五九
妻爭ひの物語　七七
津村正恭　八九、二六四、二七九

テ・デ

帝國圖書館　二八五
低地の傳說　八一
田樂　一三〇
天狗　一七七
傳寫本　二七五
傳說の採集地　八〇
傳說の流布　七九
天明の大飢饉　一七七

ト・ド

都邑の傳說　八〇
同朋衆　六三
東北人　三一〇

東北振興會　三〇九、三一〇
「土佐國群書類從」　二九九
「都市と農村」　六六
圖書館　二一二、二三八、二四三、二九七、三〇一、三三二
土俗誌家　一四二
「讀書矩」　二一三、二三三
讀書子の選擇　二三四
讀書術　二一九、二二七
德富蘇峰　二三五
土橋里木　二六
「遠野物語」　六七、九三、二三五
鳥居龍藏　三〇八
兎園會時代　二七八
ドンコ　一二六

ナ

內閣文庫　二〇五、二二八、二二七、二九〇、二九九、三三三
中田千畝　五
中田直慈　一五四
中村軍治郎　一九九
「中村氏記錄」　三〇四
中山太郎　一八
中井竹山　二一五
永井龍一　一三三
「南島說話」　五一
「南部叢書」　二〇五、二八一、二九七、三二、三三、三二八

ニ

日記　二八三

新渡戶稻造　一八二、一八五
「日本藝林叢書」　一八九
「日本珍書考」　二一六
日本傳說集　二五
日本の學問　一六一
「日本靈異記」　二一九
「女人政治考」　二一
人形舞はし　一四九

ヌ

布引の瀧　一五〇

ネ

根岸肥前守　一九〇、一九二
ねと　一六

ノ

能因法師　二〇八、二四六
野口恒重　四一
「能登國名跡志」　二一

ハ・バ

「賣笑三千年史」　二一
方言　八三
冒險家　一六三
坊主踊　一三〇
「房總叢書」　三
暴露文學　二四七
羽柴雄輔　二九九
畠作灌漑　一八四

パチェラー　二
八幡信仰　一七一
塙保己一　二四三、二八六
花祭起原論　一三九
辻石たにえ　三七
母子草　一一〇
母の力　一八
早川孝太郎　九四、一二八
はりと細工　一四九
「春の日」　二八九
藩札　一七八
帆船時代　二五

ヒ

比較神話學　三五
東山文庫　三〇三
被管　一七三
一つ家の生活　八四
人と神との懸隔　九〇
「日次記事」　一四九
日待　六五

フ・ブ・プ

風俗問狀　一三一
フオクロアの學問　三六
フオークロアの方法　六九
部曲　一三九、一四八
覆刻事業　二三六
複本の作製　二八〇
不思議話　一六

婦人雜誌　二五〇、二五五、二五七
婦人著述家　二五五
婦人問題　二一
巫女　二〇、四八、九〇
佛師の藝　一八八
風土記の編述　三〇一
船賃　二〇一
佛蘭西人　二六七
佛蘭西の紙表紙本　二六九
プリンストン大學　二三一
古本屋　二七一、二七四
フレエザー　二九
風呂敷　二〇三
分家　一七四、一七五
文藝の中央統一　二七〇
粉本　二四五

ヘ

兵農分立　一七三
平民の歴史　三〇三
漂泊者　一四六
漂泊民族　二三
邊疆現象　一三三

ホ・ボ

ホーコ　一一〇
「北條九代記」　三一六
鳳來寺の藥師　一三五
「反古の裏書」　二六五
ボサマ　六八

干大根　一九七
法華宗　一四九
穂積陳重　一〇
本地譚　一三五
本の索引　三三、三三五
本屋　三六八
飜譯　二四

マ

牧口常三郎　一八四
正木助次郎　一八四
「益田郡志」　一一六
「眞澄遊覽記」　二〇五
「松屋筆記」　二七
漫遊文人　二〇六
「滿濟准后日記」　一四八
萬歳の祝言　一四九
滿能長者　九

ミ

「參河志」　二九三
三上永人　一〇五
水帳　二八三
水野葉舟　三三五
三村竹清　一九三
三宅驥一　一八四
宮地堅磐　二九
宮良當壯　一四八
みろくぼさつ　一八
民謡の作者　一〇
民間藝術　一三一
民間信仰　一二九
民間信仰團　二〇
民間說話　九、二六、二八
民間傳承　七、一二九
民間傳承の學　一四七
民俗學　一四四
民俗採集の方法　一二六
民族心理　三

ム

昔話採集の方法　二
昔話の聽手　二六
昔話の登場人物　一三
昔話の特殊性　六
昔話の方式　一
無形文化　一二六
蒙干　二三〇
宗像信仰　一七一
村組織　五一
村の文庫　二三〇
村尾正靖　一九四

メ

目無しダルマ　四〇

モ

モデル　二四五、二四八、二四九
物忌み　一四一
物と言葉　一二六

糊摺歌　一〇四
紅葉山文庫　二八六
「文德實錄」　一一〇
門閥家　一七四

ヤ

彌五郎殿　一四六
椰子の實　一九六
宿屋　二〇〇
八橋流　一七九
「大和叢書」　七三
「山の傳說」　八二
山人　八四
矢部鴨北　三一

ヨ

「用捨箱」　三三
用立金　一七八
「吉城郡袖川村誌」　一一六
吉益東洞　三一三、三二三
吉村春峯　二九九
依田學海　二六五
讀賣瓦版　一〇三
讀物の選擇　二五三

ラ

「老媼夜譚」　毛、七〇
浪人　一九三

リ

柳亭種彥　三三〇
俚謠集　一〇五
「六國史」　二六六
理想的青年　二〇一
リベース　九七
輪廻の思想　九一

レ

「靈怪談淵」　一四
歷史假名遣　一三一
歷史の學問　三〇五

ロ

驢馬の耳　五五
「爐邊叢書」　五一、一二五

ワ

若葉の魂　九一
渡邊政香　二九三
亘理氏　一七二
「和名抄箋註」　四一
わらじの値段　二〇一
笑ひの繼承　七

ヰ

井澤長秀　三一六
井上圓了　一三
亥子　二二

ヲ

小笠原謙吉　毛
岡田蒼溟　一三
小椋　三六
桶屋　六五
小田島氏　三三五
小野武夫　一八四
小原敏丸　二八一、三一八、三二四、三三三
女と歴史　一八

本書の原本は書物展望社發行
昭和八年七月版を使用した。
但し索引は新たに加へた。

刊行の言葉

こゝに柳田國男先生著作集を世に送るにあたつて一言刊行の趣旨を述べて置く。日本に民俗學の研究が興つて以來四十年、先生はこの學問の樹立者指導者として或は著述に或は講演に、又直接門下の教導に寧日なき有樣であつた。加ふるに民俗採訪の足跡は全國に遍く、山間の僻村洋上の離島に至るまでその見聞の精渉誠に掌を指すが如くである。民俗學の研究に志す者はもとより本邦文化史に思ひを寄する者、先づ先生の業績をたづねるは今日の常識である。然るに先生の論文著作はその數頗る多く而も容易に入手し難い。我等これを遺憾とし先生に乞うてその代表作をまとめて一望の下に公けにせんとす。幸ひに先生にはこの計畫を贊せられ此處に刊行の運びとなつたことを喜びとする。本著作集に取扱はれたる問題は廣範にして多岐、盡く在來史學の空白として殘されし分野に研究の歩を進め獨創の見を立てられたものである。衣食住、村落と家、冠婚葬祭、國民信仰、年中行事、婦人の生活口承文藝、國語問題などいづれもその豐富なる資料を全國に亙る比較研究の下に來たし、ことさらに斷定を避けてこれを將來の研究に俟たれてゐる。我が日本の歴史が新らしき展開を告げんとするに際して我々は先づ常民の歴史を尋ねその將來の動向を決定せねばならない。學問の自由と率直なる批判の許されたる今日凡ゆる研究が精確なる事實の認識を出發點とせねばならない。この意味に於て本著作集の持つ意義は多言を要せざる處である。江湖の精讀を希望する次第である。たゞ現下出版界の惡條件は到底これを我々の理想とする形式の下に出版するを許さず、可能なる限りの努力を以て滿足するの外なきことである。讀者これを諒とせられたい。終りに臨み本計畫に援助を惜まざりし出版社各位に對し深甚の謝意を表するものである。（昭和二十二年三月　柳田國男先生著作集刊行會）

柳田國男先生著作集

第一冊	山の人生	初版	五十圓
第二冊	地名の研究	再版	百二十圓
第三冊	信州隨筆	再版	二百五十圓
第四冊	時代ト農政	初版	百二十圓
第五冊	木思石語	初版	百八十圓
第六冊	北國紀行	初版	二百三十圓
第七冊	女性と民間傳承	初版	二百四十圓
第八冊	退讀書歴	初版	二百七十圓
第九冊	老讀書歴		
第十冊	新語論		
第十一冊	神を助けた話		

以下續刊

エト 6Q-14

割當事務庁
讓渡図書

柳田國男先生著作集　第八册
退讀書歷　定價二百七十圓
昭和二十四年四月十日　發行
著者　柳田國男
發行者　梅山礼
印刷所　大日本印刷株式會社
小原製本
發行所　實業之日本社
東京都中央區銀座西一ノ三
電話京橋五三一—五・振替東京三三六
會員番號A一一〇〇〇八

終